神様のメモ帳2
杉井 光
イラスト✻岸田メル
電撃文庫

神様のメモ帳2

杉井 光
イラスト✽岸田メル

藤島 鳴海
Narumi Fujishima
去年までは、どこにでもいるただの高校生だった僕。
冬に起きたたいへんな事件のせいで、三学期は丸ごと潰れてしまった。
それでも奇蹟的に進級できたけど、あいかわらず授業にはちっともついていけないし、テストも赤点ばっかり。気づけば人生転落寸前の崖っぷち。
このまま無職まっしぐらになるわけにはいかず、一念発起して二つもアルバイトを始めた。
一つはラーメン屋の店員。もう一つは……探偵助手だ。
……バイト先の選択を間違えたかもしれない。そもそも雇い主の片方がニートだし。その上、職場の近くにニートたちが常時たむろしていて、僕を引きずり込もうとするのだ。
どんな連中かというと——

アリス
Alice
こいつは、ニート探偵。僕の雇い主その1だ。
部屋からほとんど外に出ないひきこもり。そのせいもあって人使いが荒い。
探偵助手（僕）のことは、ちょっと便利な喋る掃除機ぐらいにしか思っていない。
非力で生活能力ゼロのくせに口だけは達者だから、文句を言うと五千倍くらいになって返ってくる。
ほんと、なんでこんなやつの下で僕は働いてるんだろう。
自分でもよくわからないけど、でも僕がいないとこいつ飯もまともに食わないしな……。

ニート探偵団
NEET Detectives
アリスのもとには、彼女に負けず劣らずの社会不適合者たちが集まっている。
どんな逆境でも、あきらめない・振り向かない・働かない、それがニート探偵団だ。やれやれ。
テツ先輩
Tetsu
僕の通っている高校を、数年前に中退した人。今じゃ押しも押されもせぬパチプロ。
ボクシングで鍛えた超人的な動体視力も、スロットの目押しにしか使っていない。
たまに頼りにはなるんだけど、とにかくお金にだらしないんだ。
少佐
The Major
こんななりだけど、これでも大学生。筋金入りのミリタリーマニア。
大学教授も惜しむほどのメカニック技術を、盗撮や盗聴にしか使っていない。
ヒロさん
Hiro
よくモデルだと間違われるらしいけど、その実は女の子の部屋に居候するヒモ。
だれもが振り向くルックスも美酒のような話術も、ナンパにしか使っていない。
山ほど女の人を泣かせているので、いつか刺されるかもしれない。

ミンさん
Min
探偵事務所と同じビルの一階でラーメン屋をやってるおねえさん。僕の雇い主その2。
僕のまわりでは数少ない、まっとうな社会人だ。世話になりまくっているので頭が上がらない。
喧嘩っ早い人なので、ラーメンがあんまり美味しくない、なんて怖くて言えない。
四代目
The Fourth
街中の不良ニート少年たちを束ねるヘッド。探偵団のみんなとは腐れ縁。
口は悪いし気も短いんだけど、面倒見はいいらしい。探偵団の連中よりずっとまとも。
手芸が趣味でプロ並みの腕だってことは、ばらしたら殺されそうなのでだれにも言えない。

Meo
メオ
ラーメン屋で僕が働き始めた日。いつものようにアリスにあごで使われながら、僕が自分の人生にちょっと疑問を抱きつつぼんやり過ごしていた土曜日の午後に、彼女はやってきた。タイで生まれ育ったという、変なテンションの女の子。なんと、探偵事務所に用があるという。
探偵助手の身ながら、僕は驚いてしまった。まさかほんとに依頼客が来ることがあるなんてね。
ニート探偵に調査を頼む程度なら、大した困りごとじゃないのだろう、と思ってしまった。
でも──

彼女の持っていたボストンバッグには、ぎっしりと濃いリアルが詰まっていた。
二億円。
それは、だれかの人生を狂わせてなお、お釣りが来るほどの金額だ。
メオは言った。「お父さんを、助けて」
そうして——事件は転がり始める。
僕らの思いもよらぬ、ひりついた暗闇の中へと。
デザイン✻鈴木 亨

Contents

奇跡は　誰にでも
一度おきる
だが
おきたことには
誰も気がつかない

『わたしは真悟』楳図かずお

1

東京二十三区は隅から隅までぎっしりと高層ビルで埋まった都会だと思っている人がごくたまにいる。たとえば引っ越してくるまでの僕がそうだった。でも実際は、空を突き刺すみたいにつんつん尖っているのは大きな駅のすぐそばだけで、そのまわりにはべったりと平坦な街が広がっている。地盤沈下ででこぼこになったアスファルト道路も、酸っぱいにおいのするどぶ川も、だれが世話してるんだかわからない畑も、僕の通っている高校も、みんな駅を中心とした半径二キロの円内に詰まっている。ネオンの光なんて道路一本隔てるだけで届かなくなる。

『ラーメンはなまる』も、駅から歩いて五分の近さなのに、しょぼくれたビルに囲まれているせいで都会の光が届かない店のひとつだ。カウンター席が五つしかない狭いラーメン屋なのだけれど、酔っぱらいが徘徊する夜はともかくとして、昼時にその椅子が埋まっているのを見たことがない。

だから僕の採用試験は、春休みも半ばの三月三十一日、早くも客足が途絶え店内にだれもいなくなった午後一時半に行われた。

「いいか、中身ちょっとでもこぼしたら不採用だからな」

そう言ってミンさんは、湯気を立てる丼を載せたトレイを次々と僕に渡した。彼女は『ラーメンはなまる』の若き店主で、長い髪は高く束ねたポニーテイルにして、季節を問わずタンクトップで健康そうな両肩をむき出しにしている。大きく開いた胸元に見えるのは、何重にも巻いた白いさらし。見た目通りの体育会系で、か弱い文系高校生の僕が逆らえる相手ではない。でも一応口答えしてみた。

「あのう、なんでバイトの採用試験なのにこんなことを」

「おまえ、いくつ丼割ったと思ってるんだ。緊張感が足りないんだよ。だからそれ、ちゃんとアリスのとこまで出前できたら雇ってやる」

僕は以前、この店でちょっとだけ洗い物と給仕を手伝ったことがあって、そのときにものすごい損害を出したのである。むしろ試験してくれるミンさんの優しさに感謝すべきなのかもしれない。

「はいスタート。制限時間五分な」

「タイムリミットまであるんですか!」

ミンさんににらまれ、僕は忍び足で勝手口から外に出た。

アリスは、『ラーメンはなまる』と同じビルの三階、八号室に住んでいる。非常階段を上って廊下を五メートルくらい奥に進めばすぐだ。一階にある店から一分もかからない。

でもそのときの僕は階段を一段上るのにも二秒くらいかけていたので、『NEET探偵事務所』と書かれた看板の前にたどりつく頃には汗びっしょりになっていた。

両手はトレイでふさがっているので、肘でなんとかインタフォンのボタンを押す。返事代わりに、青いランプが明滅する。

「アリス、頼む、ドア開けて」僕は哀願した。

『……勝手に開けて入りたまえよ。鍵はかかっていない』

インタフォンから幼い少女の声がけだるそうに返ってくる。

「両手使えないんだトレイ二つ持ってるから」

『下に置けばいいじゃないか』

「むり。絶対落とす」

『なにを言ってるんだきみは。床にトレイを下ろすなんて簡単なこともできないくらい不器用だとは思わなかった』

「頭の上にも載ってるんだよ！」

僕の悲痛な声に、やがてドアが開いて少女が顔を出した。足下まで流れ落ちる黒蜜のような髪、強い光を宿す大粒の瞳、クマさん柄の可愛らしいパジャマからのぞく病的に白い肌。

「……大道芸でも始めたのかい」

両手に一つずつ、それから頭の上にも一つ、丼とトレイを搭載してぷるぷると震えている僕を一瞥して、アリスはあきれた口調で言った。

「なかなか面白い画だから撮っておこう。あとでテツや少佐に見せたら喜ぶにちがいない。デジカメを取ってくるからそのままで待っていたまえ」

「いや、そんなのいいから」奥に引っ込もうとするアリスを僕は必死に呼び止める。「とりあえず、これ、取って、くれないかな」

頭の上で危ういバランスで揺れているトレイを、目で示す。でもアリスは肩をすくめた。

「ぼくときみの身長差、それからぼくの腕の筋力を考慮したまえよ。無理に決まっているだろう。部屋にあがってどこかに置くといい。ちゃんと靴は脱ぎたまえよ。床に落として汚したりしたらワックスがけまでやらせるからそのつもりでね」

アリスは相変わらず血も涙もなかった。

上半身を動かさないようにしてそうっと靴を脱ぎ、キチネットの流し台にたどり着いて両手に持っていたトレイを置き、頭の上のトレイをそっと下ろした。魂までつられて引っぱり出されてしまいそうなくらい長いため息が、クーラーの効いた冷たい床の上にとぐろを巻いた。

「……ああ、マスターかい？　うん、ナルミは今到着した」奥の部屋から、アリスがミンさんに電話している声が聞こえてくる。「……いや、ちゃんとこぼさず持ってきたようだよ。マスターは優しいね。ぼくなら丼

じゃなくてバケツにするね」
好き放題言いやがって。そう思いながら、僕は三つの丼を一つのトレイにまとめて載せると、奥の寝室に運んだ。
三面の壁は、天井までの高さのラックですべて覆われ、そこには怪しげな機械類がずらっと並んでいて、複雑に絡んだ配線がいたるところでのたくっている。部屋の中央には大きめのベッド。毛布の上には大小さまざまなぬいぐるみが積み重ねられ、その中に埋まるようにしてアリスが座っていた。
「まさか三つとも食べろと言うんじゃないだろうね」
僕が持ってきた丼を、アリスはにらんだ。このパジャマ娘は偏食の上に少食、いつも食事を残さずに食べさせるのに苦労する。三つの丼にはそれぞれ、味のちがうラーメンが少量ずつ入っていた。
「たぶんミンさんは僕が一つか二つひっくり返すのを計算に入れてたんじゃないかな」
「どうしてこぼさずに持って来るんだい！　普段は鼻の頭にカマキリがとまっても気づかないくらい魯鈍なくせに」
なんで罵倒されなきゃいけないんだろう……。
僕は病院のベッドに備え付けてあるような可動式のサイドテーブルを引っぱり出すと、トレイをアリスの前に置いた。
「アリスがどれか選んだら、残り二つは僕が食べるよ」

パジャマ娘（むすめ）は丼（どんぶり）の中に顔を突っ込まんばかりにしてラーメンをそれぞれ観察した。
「なるべく味の薄（うす）いやつがいい」
すがるような目で僕を見上げて言う。
「三つとも新作らしいからどんな味かわからないんだよね」
「むー」
かなり迷った末にアリスは透明なスープのやつを選んだ。しかし麺（めん）をちゅるんと一本すすって絶句する。
「どしたの」
「……酸（す）っぱい」
酸っぱい？　ラーメンが？
ああ、そういえば最近ミンさんは変わり種（だね）のラーメンに凝（こ）っていたけど。
「うう……スープの色にだまされた。不覚だよ。またもこんな罠（わな）が仕掛けられているなんて」
アリスは涙目（なみだめ）になりながらも麺を一本一本箸（はし）でつまんで口に運ぶ。
「こっちのは二つとも普通の味っぽいけど、取り替える？」
ベッドの手前に座って自分の分の丼を抱（かか）えながら僕は言った。でもアリスは潤（うる）んだ目で、きっと僕をにらみつける。

「ラーメン一杯を平気な顔をして平らげるきみみたいな人間の舌を信用できるもんか。ぼくが自己判断でこの丼を選んだんだ、この上きみの諫言に唯々諾々としたがってそちらと交換し、やはり口に合わないという最悪の事態に陥ったら、深く傷ついたぼくの矜持はなにをもって癒せばいいというんだい」

　ラーメン一杯平らげるのは異常でもなんでもないと反論しようとしたが、「うー、うー」と泣きながら麺を一本一本すすりこんでいるアリスを見ているとなんだかかわいそうになってきたので、僕は口をつぐんだ。あっという間に二つとも丼を空にすると、キチネットに行く。

　冷蔵庫の戸を開くと、中にはぎっしりと詰まったドクターペッパーの深紅の３５０ミリ缶。一本抜き取ってアリスのところに持っていく。最近はプルタブを上げてから出してやるという気遣いを憶えた。アリスは震える手で缶を引ったくって一気に飲み干す。

「ふううううう」

　脳味噌溶けるんじゃないかというくらいの安堵のため息をつくと、アリスは「ナルミ、もう二本持ってきてくれたまえ」と空き缶を振った。このパジャマ娘、実に不健康なことに食生活のほとんどをドクターペッパーに依存しているのである。あんなもん飲みながらラーメン食べるやつに舌を信用できないなどと言われたくはなかった。

「人と人は支え合って生きているという真実を、ぼくは今強く実感しているところだよ。きみがそばにいてくれてよかった」

ラーメンを食べ終えて三本目のドクターペッパーも空にしたアリスは、毛布の中にもそもそと潜り込みながら僕に微笑みかける。不意をつかれた僕はどぎまぎして、肘の先で丼を引っかけて落としそうになってしまう。落ち着け。こいつはこういう意味深なことをさらっというやつなのだ。そもそもアリスに支えてもらった憶えはないぞ？　いや……ないとも言えないか。どうなんだろう。

「ところで、『はなまる』で働きたいとは、またどういう風の吹き回しだい？」

　毛布の中から頭だけ出して、アリスは訊いてきた。

「きみに生まれつき就労意欲が欠けていることはこのぼくが全幅の保証をするよ、わざわざマスターに迷惑をかけてまで確かめたりしなくてもいい」

「そんな保証要らないよ」つーか僕の人生を勝手に決めつけんな。「ミンさんもひとりで大変そうだし、『はなまる』でバイトしてれば色々と便利だと思ってさ」

「便利？」

「だって、ここにはだいたい毎日来るし」

　この冬、アリスが解決した事件がきっかけで、僕はこの探偵事務所の助手という立場なのである。しかし探偵とはいってもアリスはこの通り社会性ゼロのひきこもりだし、依頼客が来ているところなど見たことがないから、助手の仕事といえばせいぜい食事とドクターペッパーを運んで、そのたびにアリスにいじめられることだけだ。それなら、バイトでもした方が時間が無駄にならなくていい。

「ふむ。きみがそれほど助手業務に熱心とは思わなかったな」

　おまえが毎日来いって言ったんだろが！

「まあ、このご時世に薄給のラーメン屋店員のなり手がそうそういるとも思えないからマスターは助かるかもしれないが、彩夏が退院したらきみは馘首だね」

　僕は丼を片づけようとしていた手を止めた。

　アリスが唐突に口にしたその名前をしばらく呑み込めずに、丼の底に残ったスープをじっと見つめた後で、ベッドの方を向いた。

「どうしたんだい。きみだって彩夏が戻ってくるまでのつなぎのつもりだったんだろう？」

「いや……え、あの……そんなこと、考えてなかった。だって」

　彩夏。

　今年のはじめに学校の屋上から飛び降りて、今は植物状態となって病院の個室にいる、僕のクラスメイト。僕の、たったひとりの友達。もう喋ることも、自分の足で歩くこともできない。

　その彩夏が——戻ってくる？

「可能性はゼロではないと医者が言ったのだろう。それを最初に聞いたのはきみじゃないか」

「そうだけど。でも」

　僕だって、色々調べた。今の彩夏のような状態は三ヶ月続くと遷延性意識障害——俗にいう植物状態と認定され、回復の見込みなしとしてほとんどの病院では退院を余儀なくさせられる。回復した例がある

とはいわれているけれど、そのほとんどはある程度の顔の動きで感情表現できるようになったとか、経口(けいこう)で食べ物が摂取(せっしゅ)できるようになったとか、それくらいだ。

　この生活に戻ってくるなんて、奇蹟(きせき)みたいなものだ。

「きみは奇蹟を信じないのかい？」アリスは笑う。

「アリスは信じてるの」

「もちろんだよ。奇蹟はだれにでも一度起きる。だが、起きたことにはだれも気がつかない」

　だれの言葉か知らないが、ひどい言い方だと思った。起きないと言ってくれた方がまだしも救いがある。それじゃあ僕と彩夏(あやか)のぶんの奇蹟は、屋上で過ごしたあの日々のどこかで知らずのうちに使い果たされていて、もう手遅れなのかもしれないじゃないか。

「大丈夫。一度起きたのなら二度目も起きる。信じたまえ」毛布を肩(かた)からかぶり、膝(ひざ)を抱(かか)えてアリスは微笑(ほほえ)む。「サハラ砂漠に降る雨粒も、ゴールデンゲイトもタージマハルも、両親の死後に生まれてくる試験管ベイビーも、ジミ・ヘンドリクスもバベルの塔(とう)も、すべては奇蹟、奇蹟、奇蹟だ。きっといつか、ぼくら全員が友達になれる日が来る」

　相変わらずアリスの引用癖(へき)は意味がわからなかった。でも僕は無理につくった笑みを返す。

「きみとぼくが出逢(あ)ったことも、きみがこうして毎日ここに来てくれることも。丼(どんぶり)をひっくり返さずに運べたことも、すべて奇蹟だよ」

「……うまくオチがついたなあ」

僕は立ち上がった。そうだ、採用試験には合格したのだ。早くミンさんのところに戻ろう。今日からでも働けるし。

ところが丼三つとトレイ三枚を重ねて部屋を出ていこうとした僕を、アリスが呼び止めた。

「さっきマスターが電話で言っていたのだよ」

「なに?」

「帰りも頭に載せて戻ってくるように、だそうだ」

「聞いてねえぞ!」

✽

出逢いはすべて奇蹟だというのは悪くない考えかもしれない。とくに、アリスはひきこもりだし。僕は僕で、知らない人と二十秒以上喋っていると息が苦しくなってくる病気だし。

これまで出逢ったどんな人も、良かれ悪しかれ僕という人間に影響を与えているわけで、おかげさまで僕はこれ以上ろくでもない人間に堕ちることもなく、かといってまともな人間に成長することもなく、なんとか十六歳まで生きてきたわけだ。無限の可能性が広がる荒野を、人との出逢いだけを頼りに歩いて現在の僕という地点までたどりついたのなら、なるほどその道標の一つ一つはかけがえのないものかもしれない。ありがたいとは思わないけれど。

だから、僕が『はなまる』採用試験に合格し働き始めたその日にあの娘と出逢ったという符合も、たぶんなにかの奇蹟なんだろう。

彼女がやってきたのは午後三時過ぎで、僕はそのとき厨房でチョコレートの塊を湯煎にかけて溶かしていた。ミンさんは奥の方にいて、卵白をハンドミキサーで泡立ててメレンゲを作っている。『ラーメンはなまる』の売りはプロ顔負けの手作りアイスクリームなのだ。店内にはラーメン屋にあるまじき甘い匂いが充満し、客は一人もいなかった。

だからだろう、「ごめんください!」と勢い良く引き戸を開けて入ってきたその娘は、店内の空気に触れるなりびっくりして固まり、僕の手にしたチョコ入りのボウルを二秒ほどまじまじと見つめてから、二歩退がって店ののれんを確認した。

肌がくっきりとカフェオレ色をした、ひどく目立つ女の子だった。歳は僕より一つ二つ下くらい、胸くらいまでの長さの髪を無造作な三つ編みにして左右に垂らし、エスニックな見慣れない文字を白抜きにした青いTシャツを着て、太ももで切り落としたデニムのショートパンツをはいている。太平洋を泳いで渡ってきて今さっき東京湾に着いたんですと言われたら信じてしまいそうなくらい健康的できれいな脚だった。肩にかけた焦げ茶色のでかいボストンバッグが、なんだか不釣り合いに見える。

僕と目が合うと、彼女は「サワディ」と言って合掌し、ちょっと頭を下げた。僕も思わず同じ挨拶を返してしまう。えーと、どこの国?

のれんをもう一度確かめてから彼女は言った。

「あの、これ、『ラーメンはなまる』て読むんですよね？」

きれいな発音の日本語だった。僕はなんだか後ろめたくなって、チョコの入ったボウルを流しの中に隠しながら答える。

「えーと……たぶん」

「たぶんっ？」ボストンバッグがその娘(こ)の肩(かた)からずり落ちそうになる。「ごめんなさい漢字あんまり読めないんです」

　いや、漢字は一文字も使ってないぞ？

「おおっ？　じゃあこれはなんて読むんですか」

　彼女はのれんの端(はし)を引っぱって指さした。

「……それはただのナルトの絵だ」

「これでナルトって読むんですか。日本語って難しい」

「読まないよ……」

「でもおかしいな、やっぱり場所間違えたのかな。きれいで優しそうなお姉(ねえ)さんがやってる店だって聞いたんだけど」と、彼女は表情を曇らせて店のあちこちを見回す。

「うんそれはきっとべつの店だ。ミンさんは全然優しくな――あ痛っ」

　裏から厨房(ちゅうぼう)に出てきたミンさんが僕の後頭部を思いっきり殴(なぐ)った。

「なに堂々と嘘(うそ)を教えてんだおまえは」

　こぶを押さえて苦悶(くもん)する僕を押しのけて、腰(こし)エプロンをしめる。

「いらっしゃい。まだ営業してるよ。どうぞ座って」

「あ、あの、ごめんなさい、ラーメン食べに来たわけじゃないんです」

続く彼女の言葉は信じがたいものだった。
「このお店の上に探偵事務所があるって聞いて来たんです」
僕とミンさんは顔を見合わせた。
これが、僕がはじめて遭遇した、NEET探偵事務所への依頼客だった。

*

「来客とは珍しいね。ナルミ、客人にもドクターペッパーを」
普段僕には一本も飲ませてくれないドクペを(いや、飲みたいとも思わないけど)、アリスはその女の子に出させた。自分はベッドの毛布の上で正座している。たぶんそれが来客時の礼節のつもりなんだろう。
常時クーラーの効いている事務所に入ってきたばかりの女の子は、しばらく玄関口で寒さに閉口していたが、奥の寝室に通されるとアリスを目にして口をぽかんと開けて固まった。大きなバッグが肩からずり落ちて床にずんとぶつかる。表情変化のわかりやすい娘だなと思う。
「……探偵さん?」
「ニート探偵だ。アリスという。そっちは助手のナル……わ」
女の子はベッドの端に手をついてアリスににじり寄った。まるでパジャマのにおいを嗅いでるみたいに、アリスを至近距離からしげしげと観察する。

「な、なんだい」
「抱っこしてもいいですか？」
「なにをばかなこと言ってるんだきみは！」アリスは真っ赤になって女の子の顔を押しのけ、後ずさった。
「ごめんなさい、こんな探偵さん見たことないから、つい」
「なにがついだ。依頼人は依頼人らしくしていたまえよ！」
「どうしてもだめ？　一回だけでいいから」
「ぼくはぬいぐるみじゃないぞ！」そばにあったぬいぐるみを手当たり次第バリケードのように積み重ねながら、アリスはさらにベッドの奥の方へと退避する。
「まったく、彩夏といいマスターといい、どうして女はぼくを見ると抱きつきたがるんだ。理解に苦しむよ」
いや、その気持ちはなんとなくわかるぞ。しかし話がこじれそうなので僕は黙っている。
「さっさと身分を明かして依頼内容を話したまえ。きみだってここに遊びにきたわけじゃないんだろう」
ぬいぐるみの山の向こうから、アリスがむくれたまま言う。
「おぅ。そうでした」女の子はベッドの端から膝を下ろした。「メオっていいます」
彼女の名前の発音は「メ」の後に微妙な伸ばす音が続き、「オ」は奥に引っ込むような「ゥ」に近い付属音で、日本語にはない響きだった。それから彼女は両手を頭の両側のちょっと高いところにまるで動物の耳のように当てて、指をぱたぱたと曲げ伸ばしする。

「メオ？　が名前？」と、僕は思わずベッドの脇(わき)から口を挟(はさ)む。
「そう。猫(ねこ)のことです」
「生まれはタイだね？」とアリスが言うので、メオはまた目を丸くする。
「わかるんですか？　さすが探偵さん」
「タイ語に探偵もなにもないだろう」
「変わった名前つけるんだね、タイって」
　猫、がそのまま名前なのか。あっちじゃ普通なのかな。
「それはチューレンといって、あだ名なんだよナルミ。タイの人たちはほとんどチューレンで呼び合う。名字(みょうじ)はやたらと長い場合があるし、そもそもあまり名字を気にしない文化なんだね。本名を隠(かく)すのは魔除(まよ)けの意味もあるらしい。魔物(まもの)に連れ去られるといけないから、わざと動物の名前や無意味な音列なんかをあだ名としてつけるんだ」
「魔除(まよ)けだったんですか！」とメオがびっくりする。「全然知りませんでした」
　大丈夫か本場タイ人。
「メオは五歳(さい)くらいでこっちに来たのでタイのことはあんまり知らないんです」
「あ、それで日本語うまいのか」

「日本語は、お父さんとか、同じマンションの旦那さんたちに教わりました。うち、フィリピンとか中国から来た女の人たちがいっぱい住んでるんだけど、旦那さんはだいたい日本人」
「ん？　ひょっとしてきみの住んでいるのはハロー・パレスというところじゃないかい？」
「おーぅ。探偵さんなんでも知ってるんですね！」
　メオはベッドの枠に手をついてぴょんぴょん飛び跳ねた。
「いや、ヒロに以前聞いたんだ、そういう奇妙な社宅があるって。世間は狭いものだね」
「あ、そのヒロさんから探偵事務所のこと聞きました」
　メオの言葉に、アリスと僕は視線を交わした。なるほど。ようやく話がつながってきた。
「メオの隣の部屋に中国から来たお姉さんが住んでて、ヒロさんも一ヶ月くらいそこで暮らしてたんです。去年の夏だったかな。いっぱい日本語教えてもらいました。ヒモっていう難しいお仕事をしてるって」
「ヒモは仕事じゃねえ！」
　思わずでかい声を出してしまった。ヒロさんは『ラーメンはなまる』にたむろする若者の一人で、女の子の家を転々とするヒモ暮らしである。あの人、なにを教え込んでるんだ。
「でもヒロさん、管理人さんにばれて叩き出されちゃったんです。そのとき、なにか困ったことがあったら『ラーメンはなまる』に来るといいって」

「なるほどね」アリスはため息をついて首を振った。「とりあえず後でヒロを呼ぼう。色々と言ってやりたいことがある。それはさておき、まずはその困ったことについて聞こうじゃないか。そのために来たのだろう？」

そこでようやく、曇り一つなかったメオの顔に翳（かげ）りがさした。

「お昼頃、家に電話がかかってきたんです。お父さんから」

メオはベッドの手前にぺたりと座って、語り出す。

「『金庫に入ってる鞄（かばん）持ってどこかに身を隠（かく）せ』っていきなり。なんのことかわかんないけど、お父さん声が怖かったから言う通りに」

「その鞄が、これ」と、僕は足下のボストンバッグを指さす。

「そうです。すっごく重い。くたびれちゃった」

「父上にこちらから連絡とってみたのかい？」

メオは顔を曇らせる。

「会社には絶対連絡するな、家にもしばらく寄るなって言われて。それから携帯にかけても出ないの。身を隠（かく）せって言われてもそんなあてないし。それで、ヒロさんに教えてもらった探偵（たんてい）事務所のこと思い出したの」

「お父さんの名前は？　なにしてる人？」
「草壁昌也います。ハロー・コーポレーションて会社で働いてる」
　アリスは眉をひそめた。
「その名前もヒロに聞いたな。隣室にやくざみたいな男が娘と住んでいるって、あれはきみのことだったのだね」
「お父さん今はやくざじゃないよ」
……今は？
「昔、大阪の方にいた頃は組に入ってたけど、もうやめたって」
　元やくざが娘に突然電話をかけてきて、とうぶん身を隠せと言う。しかも荷物つき。ひどくきなくさい。
　再びボストンバッグに目を注ぐ。なんだか爆薬でも入っているみたいに思えてきた。
「中身は見たのかい、メオ」
「ううん」
「じゃあ」アリスは声を落とし、ベッドの端から足を床におろす。「ぼくに見せてもかまわないと思うのであれば、バッグを開きたまえ。ただし言っておくが、開けたらもうスイッチが入り、後戻りできなくなるだろう。おそらくはね」

僕もメオもアリスの顔を見た。例によって、突然謎なことを言い出すやつだ。

「……爆弾でも入ってるの？」

メオが僕と同じ疑問を口にした。アリスはもろそうな笑みを浮かべて首を振る。

「歴史上最も多く人を殺してきたものはなんだと思う？　爆薬ではないし毒薬でもない。情報だよ。知ることは死ぬこと。それでも、きみの父上がどんな目に遭っているのか知らなければ手は貸せない。決心がついたら、開けたまえ」

メオが唾を呑み込む音が聞こえた気がした。彼女の視線は、ボストンバッグとアリスの顔の間を三往復くらいさまよった。

メオがバッグのジッパーを引いた瞬間、曰く言い難いにおいが部屋中に広がったような気がした。なんのにおいなのか一瞬わからなかった。危険のにおい。欲望のにおい？　あるいは、これがいわゆる——

「わ……」

「うわぁ……」

僕とメオは同時に声を漏らした。鞄の中に溜まった闇の底から僕らをにらみあげる、無数の福沢諭吉の顔。ぎっしりと無造作に詰め込まれた一万円札の束。むせ返るような金のにおいは、もちろん錯覚だった。そうとわかっていても、これだけの大金——億はあるんじゃないだろうか——をはじめて目にした僕は、軽い酩酊を味わっていた。

やがてメオのつぶやきが沈黙を破る。

「……どうして、こんなお金……」
「きみの家はこんなに蓄財（ちくざい）できるほどに裕福（ゆうふく）なのかい」
「うち、こんなにお金持ちじゃないよ」
「このバッグ、ずっと金庫に入ってたの」
　僕は横から口を挟（はさ）んだ後で愚問（ぐもん）だと気づく。ずっと金庫に入っていたならメオにわかるはずないか。メオは目をつむって「んー」と人差し指でこめかみをぐりぐりする。
「たまに会社から持って帰ってきたのを見た。あ、お給料日とかに。わあすごいお父（とう）さんこんなにお給料もらってたんだ」
　んなわけねえだろ。
「アリス、これ会社の金じゃないの……」
「その可能性はあるね」
　いきなり連絡を絶った父親。自宅の大金を持ち出させて隠（かく）れるように言った。自分も逃げてどこかに隠れたのだ。しかも、元やくざ。
「これやばいよ、警察行った方が」
　アリスの耳元に小声で囁（ささや）く。でもメオにはしっかり聞こえていたようだった。ベッドの枠（わく）をつかんで僕に詰め寄ってくる。
「どういうことっ？　お父さんがどうしたの」

「いや……」僕は返答に詰まってアリスをちらと見ながらうろたえる。

「父上は犯罪に巻き込まれているかもしれない」

かわりにアリスがぴしゃりと言ってくれた。メオの表情が固まる。

「いや、言葉を飾るのはよそう。きみの父上は会社の金を詐取し、それが露見したために逃亡した可能性がある」

「お父さんそんなことしない！」

メオはぬいぐるみを蹴散らしてベッドに飛び乗り、アリスの肩をつかんだ。

「落ち着きたまえ。可能性の話だ。家にも会社にも近づくなということはきみの居場所が会社に知られてはまずいということだ、加えて本人も音信不通となれば――」

アリスの言葉も耳に入らないようで、ベッドから飛び降りると床のボストンバッグをひっつかんで玄関に向かって駆けだした。

「ナルミ！」

アリスに言われるまでもなかった。自分でも普段の鈍さからは考えられないくらい反射的に身体が動いて、玄関の前でメオの肩をつかまえた。

「放してへんたい！　ちかん！　油すまし！　マチカネフクキタル！　名古屋こーちん！」

てめえそのボキャブラリはどこから仕入れたんだ日本語詳しくなさそうな顔しやがってヒロさんだなヒロさんが教え込んだんだなつうか後半のはそれ罵倒語じゃねえ痛い引っ掻くなちくしょう落ち着けっての暴れんな！

　事務所の壁の薄さを心配しながらも、僕はメオを羽交い締めにして耳元で叫んだ。

「いいから落ち着けって！　お父さんどこいるのか知らないんだろ出てってどうすんだよ！」

「捜しに行く！　お父さん泥棒なんてしない！」

「行ってどうす――」

「はなしてーっ！」

　そこから先の罵倒は（たぶん）タイ語になってしまってよくわからなかった。おまけにばたばた暴れるので、腕力のない僕はもう限界だった。

「メオ。父上がなんと言っていたのか忘れたのかい」

　背中から凛とした少女の声がぶつけられ、僕の腕の中でメオが固まる。

「身を隠せと言っていたのだろう。なにか深刻な事態に巻き込まれていることは確かなんだ。きみの身にも危険が及ぶ可能性もある。出ていってその配慮をぶち壊しにしてどうする」

「……でもっ」

　メオは身をよじって僕の腕から逃れた。涙ぐんでいるのがわかる。

「警察を呼んで来てもらえばいい。きみの方からあてもなく捜しに行くなんてただの愚行だ」
「……警察？」
　メオの顔が曇る。
「警察やだ。お父さんも警察には言うなって言ってた。あの人たち肌の色がちがうだけでひどいことする。うちのマンションの人はみんなちゃんとビザ持ってるのに」
　別人みたいにこわばった口調だった。
「……なんかあったの」
　顔をのぞきこもうとすると、メオはぶんぶん首を振った。
「お父さんも、昔やくざだったからってだけで疑われるんだ、きっと」
　なんだか急に生々しい話になってきたので、僕は黙り込むしかない。
　たしかに、東南アジアから来た人たちにとっては決して住み良い国とは言えないかもしれない。それに僕だってメオのお父さんが元やくざというだけで、会社の金を持ち逃げしてもおかしくない、なんて安直に考えてしまっている。でも――
　警察には言うな？　そんなことわざわざ言うってことは、やっぱりなにか犯罪っぽいことがあったんじゃないのか。
「だからメオ自分で捜す」
「居場所も知らないくせに――」

「こっちを向きたまえ。きみの目の前にいるのはだれだい？」
ぴしゃりとアリスの声が飛ぶ。
振り向くと、いつの間にかアリスはベッドから下りて、寝室の入り口、無数のモニタが放つ逆光の中に立っている。
言葉を途中で遮られた僕は、だれにも聞こえないくらいそっとため息をつくと、メオから離れてキチネットの流し台に寄りかかった。ベッドから出たアリスには、まず口出しできない。
「……探偵さん」
「ただの探偵じゃない。ニート探偵だ。ベッドの上に居ながらにして、世界中を検索し真実を見つけ出す」
メオはぐったりと床に膝をついた。涙目で、しばらくアリスをにらむ。だれも口を開かなかった。僕もなにか言おうとしたけれど、有効な言葉は一つとして思いつけなかった。依頼者と探偵の間に、助手が口を挟む余地はない——アリスは僕を見ていなかったけれど、彼女の目はそう言っているような気がした。
「お父さんも、見つけられるんですか」
湿ったメオの声。
「それは依頼かい？」
答えるアリスの声はどこまでも冷たい。

「依頼されれば、ニート探偵は三千世界の彼方までも検索し尽くしてそれに応えよう。依頼がなければ、ぼくはただの物言わぬ無数の窓のままだ」

　メオは手の甲でぐしぐしと目尻をこすった。

「依頼する」くっきりとした声で言う。「お父さんを助けて」

　ほっとした顔をしたのは、アリスの方だった。僕にはその安堵の理由がわかる。事件を通してしか外の世界に触れられないひきこもりの探偵は、依頼がなければベッドの上でひとり情報を貯め込んでいくしかない。アリスの孤独も、なにもできないまま世界が進行していく恐怖も、この冬に体験した事件で僕は聞かされていた。

　それでも。

　やっぱり、口を出さないわけにはいかなかった。

「警察、どうしても行かないの」

　メオとアリスが同時に僕の方を向く。先に答えたのはアリスの方だった。

「依頼者の要請には可能な限り従うのが探偵だよ」

　メオはふるふると首を振るだけ。僕はため息をついて、髪の毛をかき回す。

「ほんとに犯罪だったらどうするつもりなんだよ……」

「お父さん悪い人じゃない」

うるせえな。わかったよそれはもう。悪い人じゃなくても犯罪に巻き込まれることはあるだろ。アリスまで危険な目に遭わせたくない。

　でも、アリスは冷たく言い放つ。

「ぼくが受けると決めたんだ。きみが口を出すようなことじゃない」

　僕は真っ暗な気分になる。こいつ、本気だ。ひとが心配してるってのに。

「きみがなんのためにここにいるのか、もう一度よく考えてみたまえよ」

「……アリスに食事とドクペを運ぶため？」

「本気で言ってるなら、ぼくの百万の軽蔑を帆に受けて速やかに出ていきたまえ」

　それが仕事だっておまえが言ったんじゃないか、という言葉を呑み込んで、僕はしばらく考え込む。もちろん探偵助手は探偵を手伝うためにここにいるのだ。心配するためにいるわけじゃない。でもなあ。

　冬の事件を思い出す。あのとき僕は自分のことに必死で手一杯で気づかなかったけれど、アリスたちは警察を頼まずにかなり危ない橋を渡っていたのだ。アリスもテツ先輩たちもこんなことには慣れっこなのだろう。

　ああ――そうか。

　僕が心配だったのはアリスのことじゃない。自分がついていけるかどうか不安だったのだ。というか、たぶんついていけない。知識もコネもスキルもない。

　なんのことはない、自分がびびっているだけだ。

「……悪かったよ」

メオは僕の足下から不安げな目で、アリスはベッドの上から冷ややかな目で見つめてくる。雑魚(ざこ)は黙っていろと非難されているような被害妄想(もうそう)が湧(わ)いてきたので、僕は後ずさって半分ほど冷蔵庫の陰に隠(かく)れた。

「じゃあ、じゃあさ」みじめな気持ちで言う。「依頼受けるのに一コ条件がある」

「なんできみが条件をつけるんだい」

「いやだからその」アリスの視線は耳を切り裂(さ)く二月の風みたいに痛い。「メオも隠れろって言われたんだろ。これからどうすんの」

メオはふるふる首を振った。「考えてない」考えとけよ。

「さっきみたいに飛び出していかれたら困るから、メオの身の安全もまとめて依頼してくれなきゃ受けられないよ」

メオは不思議そうに僕の顔を見上げて瞬(まばた)きを繰り返した。失踪(しっそう)した元やくざを捜(さが)すのは無理かもしれない。でも、女の子一人かくまうくらいなら、僕にもなにかできる。僕はこわごわアリスの顔をうかがった。

「いざとなればメオの身の安全を口実に草壁昌也(くさかべまさや)の捜索(そうさく)を断念できる、みたいな卑劣(ひれつ)なことを考えているわけじゃあるまいね」

「考えてないよそんなこと!」

実はちょっと考えていた。なんで無駄に鋭いんだこいつは。
「まあいい。きみの言い分はもっともだ。メオ、そういうわけだから」
「……どういう？」
「守ってくれと言いたまえ。でなければ警察に突き出す」
「な、なんだか脅されてる気がする」
「脅してなんかいない。きみの父上を捜すために必要な措置だ。三つの選択肢があると言っているんだ。このまま出ていくか、警察を呼ばれるか、自身もぼくらに託すか」
メオはしばらくボストンバッグを抱えて黙り込んでいた。それから、不意に僕に向かって三つ指突いて頭を下げる。
「ふつつかものですがよろしくお願いします」
……どこで憶えたんだそれは。だれに教え込まれたんだヒロさんか？　ヒロさんだな？
「じゃあ、ナルミ、きみが言い出したことだからね。さっそく職務を果たしたまえ」
「え？」
「メオをかくまうのだろう。マスターの家に空き部屋がたくさんある。頼んできたまえ」
「ミンさんにッ？」

ミンさんはラーメン屋のすぐ裏手の一階居住区に住んでいて、親父さんが失踪して以来、部屋がいくつか空いている。だからメオが隠れる場所としては、たしかに最適だった。でも、ええと、僕が頼まなきゃだめ？

＊

「なんで警察行かないんだ」
僕の方を見ようともせず、キャベツをざくざく刻みながら、ミンさんは言った。僕は返答に詰まり、勝手口から厨房に顔を突っ込んで不安げにこちらをうかがっているメオの顔をちらちらと振り返って、それからまたミンさんに向き直る。
「えっとその。色々と事情が」
「どんな」
「うー……」
メオのお父さんが連絡を絶ったことと、メオが逃げろと言われたことまでは話した。でも、この先どう説明したものか。
「事情話せないのにかくまえってのか」
あらためてそう言われると都合のいい話だな……。

「まあいいけど。親父の部屋が空いてるからそこ使え」
……って、いいのかよ。
「あの、メオやっぱり迷惑だから」
背後からメオの不安げな声がする。そこでようやくミンさんはこっちを向いてくれた。
「あんたは気にするな。なにかあったらナルミを殴るから。ちょっと汚いとこだけど好きに使っていいよ、どうせ余ってる部屋だし」
「だってさ」とメオを振り返ると、カフェオレ色の顔にぱあっと笑みが広がる。
「ありがと、ミンさん」
「飯はラーメンしか出ないからな。ナルミ、わたしの部屋の押入に布団あるから出してやって」
「あ、はい」
メオを連れて、厨房の奥からミンさんの家にあがる。しかし、あまりにも当たり前に命令するもんだから流されてしまったけど、女の人の寝室にほいほい入っていいんだろうか。
ミンさんのお父さんは五年前に娘とラーメン屋を放り出して失踪していた。なので、部屋は倉庫と化して、書架と食材の段ボール箱で埋まっている。僕はスープ用の乾物が入った箱を大ざっぱに積み上げると、なんとか布団を敷くスペースをつくった。メオはボストンバッグを抱えたまま部屋の入り口に立って、室内を物珍しそうにきょろきょろ見回している。

「いいのかな、使ってる部屋みたいだけど」
「でも、他にあてもないだろ。家には戻れないんだし」
　メオの表情が暗くなる。僕はあわてて付け加えた。
「後で、メオの家どうなってるのか見てくるよ。アリスの知り合いにはそういうゴタゴタが好きな変なやつがいっぱいいるから、大丈夫」
　メオを残して部屋を出ようとしたら、服の裾を引っぱられた。
「……えと。なに？」
「みんな優しいね、ミンさんも、探偵さんも、助手さんも」
　優しい？　僕が？
「さっきは、暴れたりしてごめんなさい。メオのこと心配してくれたのに。……ありがと」
　僕はぐっと言葉に詰まる。あれはメオを心配したわけじゃないので、そういうふうにストレートに感謝されてしまうとものすごく困る。どう返していいのかわからない。
「なんだかうらやましいな。ヒロさんが自慢してたの。ヒモだし帰る家もないけど『はなまる』があるって。ラーメンしか作ってくれないけど優しくてきれいなお母さん役もいるって」
　ミンさんみたいにおっかない母親はいやだな……。と、そこで僕はふと思い至る。
「ねえメオ、お母さんはどうしてるの」

今さら気づいたけれど、母親のことは一度も話に出てこなかった。メオの顔は一瞬だけ凍りつく。うつむき、床に置いたボストンバッグの上に腰を下ろして、僕を見上げた。
「……お母さんは、日本に来てすぐに病気して死んじゃった」
僕は吐息を呑み込む。でもそこでこの娘は、僕の足下から笑いかけてくるのだ。夏の朝の靄みたいにはかない笑顔で。
「でも大丈夫。マンションのお姉さんたちもいるし」
人は笑っているときの方が寂しそうに見える。僕はこの冬にそれを学んだ。
警察に事件を持ち込めば、草壁昌也は見つかるかもしれない、でも、メオはひとりぼっちになるかもしれないのだ。ようやくそのとき僕はそれを悟る。
でも、だからって、どうすればいいのかはわからなかった。もし草壁昌也を発見できたとして、彼が犯罪に関わっていたとしたら、アリスはどうするつもりなんだろう。
僕は──どうするつもりなんだろう。
「どうしたの、助手さん」黙りこくってしまった僕を、メオが下からのぞき込んでくる。僕はその視線を振り払うように首を振った。
「なんでもない。変なこと訊いてごめん」

ヒロさんはそれからすぐに店にやってきた。午後五時くらいだ。

＊

「メオちゃんが来てるんだって？」
店に駆け込んできたのは、クリーム色のウェスターナージャケットに白のチノパンツを着こなした、すらりとした長身の十九歳。ヒロさんより白が似合う男性は芸能人でも見たことがなかった。モデルかホストかという見映えだけど、どっこいニートでヒモである。
「あ、ヒロさん！」
奥でアイスを食べていたメオが厨房に顔を出す。
「今日はもう仕事終わったの？」
「ヒモはクリエイティヴな仕事だから時間は比較的自由になるんだよ」とヒロさんはにこやかにうそぶく。
「ヒロおまえちょっとこっち来い。それ以上日本の恥を広められないようにしてやる」
ミンさんが包丁を手ににらむので、ヒロさんは泡を食って店から出て裏手に回った。『ラーメンはなまる』の勝手口を出てすぐのところはビルの谷間で、積み重ねられた古タイヤやひっくり返したドラム缶、ポリバケツ、テーブル代わりの木台などがあって、ニートたちのかっこうの溜まり場になっていた。
開店前なのにとくに仕事もないので、僕も勝手口を通ってヒロさんのところに行った。なぜかメオもついてくる。

「だいたいアリスに電話で聞いたよ」ポリバケツに腰(こし)を下ろしてヒロさんは言う。「しかしわからないことだらけだな」

　僕もうなずく。

「バッグのお金、けっきょくどれくらいあったの」

　ヒロさんは隣(となり)に座ったメオの顔を見た。

「え。わかんない。数えてない」

「たぶん億(おく)はあったと思います。あんだけの量なら」と僕がかわりに答える。

「メオちゃん家(ち)そんなに金持ちだったっけ」

　メオはぷるぷる首を振った。

「だよなあ。小さい会社だし、出稼(でかせ)ぎの人たちと同じ社宅に住んでたんだもんな」

「会社のお金だと思うんですけど」

「会社の金？　なんでそんなに持ち出せるんだよ。現金だろ？」

「えっと。だから、その」僕はちょっと言い淀(よど)む。「アリスがさっき調べたんですけど、取締役らしいんで。それならどうとでもできるかな、って」

「……横領(おうりょう)にしたって、あそこそんなに儲(もう)かってたかなあ。かなり経営苦しかったって聞いたけど」

「おうりょーってなんですか？」

メオがものすごく無邪気(むじゃき)そうな顔で訊(き)いてきたので、僕もヒロさんも一瞬(いっしゅん)返答に困った。しかたなく僕はできる限り言葉を選んで答える。
「えーと。会社のお金を、立場を利用してパクること」
「助手さんまたそういうこと言う！　お父(とう)さんそんなことしない！」
メオは顔を赤くして僕の二(に)の腕(うで)をべしべし平手で叩(たた)いた。ヒロさんが間に割って入り、メオの肩(かた)を力強く押さえる。
「絶対にしてないって言い切れるか？」険しい声で訊(たず)ねる。
「絶対してない」
「信じてる？」
メオは首がちぎれそうなくらい深くうなずいた。
「うん。わかった」ヒロさんの声は一息で柔(やわ)らかさを取り戻す。「信じるのはメオちゃんの仕事。疑うのはおれらの仕事。疑わなきゃ見えてこないことがいっぱいある。だからそういう薄汚(うすぎたな)い仕事は任せて」
ヒロさんとメオの目が合う。そこでヒロさんはにっこり笑う。
やがてメオはためらいがちに、こくんとうなずく。
大したものだなあ、と思ってしまう。実のところヒロさんの言っている論理はよくわからないのだけれど、それでも黙らせてしまう力がある。きっと普段はそれをもっと邪(よこしま)な方面に使いまくっているのだろう。
女の敵(てき)め。

「どっちにしろ、まず会社とメオちゃん家がどうなってるか見てこないとな」
「ヒロさんマンションの場所知ってるんですよね。知り合いもいるし」
「あー。おれ、あそこの管理人に面割れてるんだ。モトカノの番号も消しちゃったし」
そういや叩き出されたとか言ってたっけ。じゃあどうすんの？
ヒロさんは黙って僕を見た。
メオも黙って僕を見た。
ええと……
「僕、ですか」
「しょうがない。他にいないし」
「行くのはいいんですけど、でも僕、仕事中ですよ」
「ええ？　仕事って？」
跳び上がるほど驚かれたのでなんだかひどく傷ついたが、僕は腰にしめた『はなまる』の黒エプロンをぽんぽんと叩いてみせる。
「え、ナルミ君ここでバイトはじめたの？　ほんとに？　なんで？　大丈夫だよニートは病気じゃないんだから無理して治そうとしなくても」
そもそもニートじゃねっつの。
「それに今、仕事してるようには全然見えないんだけど」

そう言われると口ごもってしまう。ヒロさんの言う通りだったからだ。

「テツ先輩とか少佐はどうしてんですか」僕は必死に矛先をそらそうとする。

「テツはさっき電話したら府中にいるって」

あ、今日は競馬か。春休み中だから曜日の感覚が消えてた。

「最終レースで電車代まですっちゃったから歩いて帰ってくるってさ。WINS行きゃいいのにね。なんで開催してもいない東京競馬場にわざわざ行くんだか」

あの腐れギャンブラー……。府中からここまで四時間はかかるぞ？

「少佐も電話つながんないんだよ。たぶんサバゲー中じゃないかな」

「バイト終わってからじゃだめですか」

「夜の仕事してる人だから、たぶん今行かないと留守」とヒロさん。ため息が出てくる。まるで見えないだれかの手が僕を働かせないようにと操っているみたいだった。わかったよ。これから行けばいいんだろ？

勝手口から厨房に戻った。ぐつぐつ煮立つ寸胴鍋の前に立って、真剣な目つきでアク取りしているミンさんにそっと声をかける。

「あの……」

「初日からエスケープか。おまえいい度胸してんなあ」

僕の顔をちらとも見ずにミンさんは言う。全部聞かれていたらしい。

「ご、ごめんなさいなんでもな――」

「いいよべつに。ひまだし。七時までに戻ってこなかったらクビな」
　出かける前に、ヒロさんがジャケットと伊達眼鏡(だてめがね)を貸してくれた。このかっこうを見ればヒロさんの知り合いだってすぐにわかってくれるとか。とすると、たぶんそのマンションに住んでいるというモトカノに買ってもらったものなんだろう。
　店の裏に駐(と)めてあった自転車を押して通りに出たとき、店内からミンさんとメオの会話がかすかに聞こえてきた。
「メオ、うちでバイトする気ない？」
「え、だめですよ今タイ料理屋さんでバイトしてるから。……あ、でも、しばらく休むから、辞(や)めさせられちゃうかも」
「やる気になったらいつでも言って。すぐにナルミをクビにするから」
　ひでえ……あんまりだ。泣きそうになりながら僕はペダルを踏み込み、夕映えに染まりつつある街に向かって走り出した。

✻

　駅の南口側に抜けて坂をずっと上り、郵便局を過ぎてちょっと行ったところで右折。中学校と大使館の間あたりで、迷って何度か同じ道を行ったり来たりしてしまった。ずっと左手に見えていた学校の校舎く

らいある四階建て煉瓦造り風の集合住宅が目的地である『ハロー・パレス』だと気づき、僕は自転車にまたがったまましばらくぽかんと口を開けて立ち止まってしまった。東南アジアからの出稼ぎ女性ばかりが住んでいるという話を聞いて、六畳間に七、八人で住んでいるようなオンボロアパートを想像していたのである。失礼な偏見だな、これは。

なんとなく、管理人室からは見えないように、建物の脇に入ったところに自転車を駐めた。

スタンドをおろしたところで、メオの持っていた目もくらむほどの大金のことを思い出す。やっぱりまともじゃない。犯罪がらみだったらほんとどうしよう？　警察がすでにメオの家に来てたりして。そしたら知らん顔すればいいだけか。

胸ポケットから伊達眼鏡を取りだしてかける。

玄関入ってすぐの管理人室にはだれもいなかった。でもなんとなく忍び足気味になってしまう。変装して潜入しようとしている怪しいやつみたいだな、僕。べつにやましいことをしているわけではない、と自分に言い聞かせながら三階まで上って、四号室の前まで行った。表札は『草壁』だけ。あたりに人の気配はないので、ちょっと安心する。一応、インタフォンを鳴らす。三分くらい待ってみたけれど、なんの反応もなかった。ノブを回してみたけど鍵がかかっている。

実はメオから鍵を預かっているのだけれど、さすがに中に入るのは気が引けた。だれかに見つかったら、どうして鍵を持ってるのか説明できないし。

しかたなく、昔ヒロさんが同棲していたという隣の三号室のインタフォンを押す。二十秒くらいたって、ドアが細く開かれ、チェーンの向こうから若い女の人が顔を出した。

「はい……」

眠たげな声。簡体字がびっしりプリントされただぼだぼのTシャツに短パン。長い髪は無造作にヘアバンドでまとめている。化粧はしていなくても目鼻立ちがくっきりした大陸系美人さんだった。

「……だれ？」

「あ、ご、ごめんなさい」寝てたのかな。「あの、桑原宏明さん知ってますよね」

ヒロさんの名前を出したとたん、女の人の目の焦点が合った。

「ヒロくん？　え？　……あ、そのジャケ」

「ええと。今、うちにメオが」

女の人の眉がぴくんと跳ねた。ものすごい勢いでドアを閉じて僕の言葉を遮ると、チェーンを外すもどかしい金属音が聞こえ、今度は大きく玄関が開く。

「あー、あー、聞いてる聞いてる、ちょっと待っててねすぐ持ってくるから」

え、ちょ、ちょっと、なんですか？

僕が玄関のドアを押さえている間に女の人は奥に引っ込むと、しばらくしてから茶色い紙袋を持って戻ってきた。

「これそのままでも食べられるけど温めた方が美味しいよ」
混乱しきった僕の手に紙袋が押しつけられる。
「え、あ、あのっ?」
わけがわからず目を白黒させている僕に、女の人はいきなり抱きついてきた。ブラジャーをつけていないのがわかって僕は硬直する。と、耳元で彼女が囁いた。
「ここじゃ話せないから、今はそれもらいに来たふりして帰って」
僕ははっとする。女の人はぱっと僕から離れ、「じゃあみんなによろしくね!」と営業がかった明るい声で言うと、僕を廊下に押し出してドアを閉めた。
廊下に取り残された僕は、しばらく紙袋の重みを腕の中で持て余す。
ここじゃ話せない?
あの人、メオの事情を知っているのだろうか。でもここじゃ話せないってどういうこと? 聞かれるとまずいだれかが部屋の中にいたとかだろうか。
なにがなんだかさっぱりわからなかったけれど、お姉さんの言った通りにすることにした。紙袋を抱えて素直に『ハロー・パレス』を出る。
玄関を出てすぐのところで袋を開いてみると、中には小さめの中華饅頭がぎっしり詰まっていて、その上に一枚の名刺が置いてあった。『エスニックパブ・シャンハイLOVE』という店名のロゴはぴかぴかのピンク色。源氏名はひらがなで『りん』だけ。その下にボールペンの走り書きがあった。

am4：00　お店の裏で待ってて

名刺（めいし）に書かれたパブの営業時間は深夜三時半までだった。店が終わるまで待ってろってことか。でも、なんでこんな回りくどい演技までしなきゃいけないんだろう。

名刺をポケットに入れると、路上に駐（と）めてある自転車の方に歩き出した。ぞくりという冷たいものを感じたのは、そのときだった。

立ち止まるべきじゃなかった。そのまま自転車に乗ってさっさと走り去るべきだった。でも僕の足はその予感に止まってしまった。視界の端（はし）に、『ハロー・パレス』から出てきてまっすぐ僕の方に向かってくる二人の人影が引っかかった。

男の片方はくたびれた革（かわ）ジャン。もう一人は悪趣味な紫（むらさき）の柄（がら）シャツにパンチパーマ。僕は気がつかなかったふりをして足を早めた。角を曲がる。マンションの影に入る。急に寒気がした。

「おい、おまえ」

男の片方が硬い声を飛ばした。それだけで僕は男がきわめて暴力的な世界の住人だと直観した。やばい。逃げるしかない。僕が自転車のスタンドを蹴（け）り上げたとき、すぐ背後にせわしげな足音が迫った。顔を上げると角を曲がった二人の男が早足で迫ってくる。

「ちょっと待ておまえ」

ほとんど脊髄（せきずい）反射だった。僕は両腕（うで）を振り上げて、手に持っていた紙袋を投げつけた。下り坂に蹴（け）り落とすようにして自転車を漕（こ）ぎ出しサドルに飛び乗ったので、どうなったのかはわからない。男の怒声が背中に吹きつけた。すぐ後ろに追いついてきて今しも襟首（えりくび）をつかまれるんじゃないか、という恐怖が僕の漕（こ）ぎ足を加速させた。ノーブレーキで坂道を下り、車道にぶつかりハンドルを右に切るなり、横からやってきた車が頬（ほお）をかすめけたたましいクラクション音を残して僕を追い越していく。

表通りを避けてよく知らない裏道をぐねぐねと走り、埃（ほこり）っぽい四車線道路に出たところで僕はようやく停車して後ろを振り向いた。もちろんあの二人の影はなかった。肩（かた）を上下させて、呼吸と鼓動（こどう）を無理矢理落ち着かせようとする。肺がぎりぎり痛んだ。

なんだろう、あの二人は。

思わず逃げてしまったのは、柄（がら）の悪さに嫌（いや）な予感がしたこと以上に、あの中国人のお姉（ねえ）さんの態度が引っかかっていたからだった。

携帯電話を取り出す。

「……あ、僕です」

『どう、依林（イーリン）には逢（あ）えた？』とヒロさん。

「え、あ、はい、逢うには逢えたんですが」

そうか、依林（イーリン）だから源氏名（げんじな）が「りん」なのか。なんて関係ないことを考えながら、僕はなんとか荒い息を落ち着け、言葉を続けた。

「メオの家、だれかに張られてます」
　電話の向こうでヒロさんは黙り込んだ。
「やくざ、かも。ヒロさん、とりあえずメオに絶対外に出るなって言っておいた方が」
『わかった。やっぱり物騒だな。ひょっとしたら四代目にもなにか頼むかもしれないな……』
　今から戻ると伝えて電話を切った。
　四代目になにか頼む事態。あり得る話だけど、それだけはかんべんしてほしかった。街ににらみをきかせる少年やくざが出てくるとなれば、拳が振るわれ血が流されることはもう避けようがないだろう。
　でも、僕の予感は悪い方だけ当たるのだ。このときだってそうだった。

＊

　午前四時のホテル街は、瞼が真っ赤に腫れ上がっているのに眠れない病人みたいな雰囲気だった。うねうねした坂道に沿って、料金とオプションが書かれた看板を照らす電灯がぽつりぽつりと続き、その頭上にぼんやりと青やピンクにライトアップされたホテルの横顔が浮かび上がっている。
　一人でそんな夜道を歩いていると、いたたまれなさに圧し潰されそうで、僕はそれぞれのホテルの料金表に無理矢理意識を向ける。最近は競争が激しいのか、謎なオプションが多い。どこも電子レンジが置い

てあるのはよくわからないし、『ドリームキャストあります！』ってのは一体どんなカップルを狙っているのだか。

そういや前の事件でここ通ったんだよな。憶えてないけど。さすがにこの時間は人通りも絶えていて静かだった。

坂を上ってホテル街を抜けると、ぱっとしない飲み屋が並ぶ通りに出る。若者の街のきらびやかな輝きからは押しのけられてしまった、おっさんのためのストリート（たぶん）。

ヒロさんの話によると、風営法の改正で、ただでさえ少なかったこの街の店舗型風俗はほとんど絶滅してホテルヘルスばっかりになってしまったんだそうだ。

絶滅危惧種である『エスニックパブ・シャンハイLOVE』は、そんな通りの入り口にあった。玄関口のガス燈風の照明や上部が丸くなった扉なんかは普通の大人向けバーといったおもむき。ピンク色のネオンも大きさ控えめで、あんまりいかがわしい店には見えない。というか風俗なの？　パブって書いてあるけど。

携帯の時計を見る。日付が変わって四月一日、三時四十五分。早すぎた。

中年男性が、明らかにプロとわかる胸元の大きく開いた服の女性と腕を組んで僕のそばを通り過ぎ、ホテル街へと歩いていく。僕は店の間の狭い通りに身体をねじ込んで隠れた。

夕方、『はなまる』に戻ったときのことを思い出す。あの中国人のお姉さん――依林さんにもらった名刺を見せてことの次第を話したら、ヒロさんはひどく言いにくそうに、「おれが行くよ。ナルミ君こんな時間に外出られないだろ」と言った。依林さんとはよっぽどひどい別れ方をしたんだろうと思う。

それに気を遣ったというのもあるけれど、僕は自分で行くと断った。このくらいのことまでヒロさんに任せていたら、できることがなくなってしまう。

しかし、パブの裏手にある有料駐車場の縁石に腰を下ろした僕は、請け合ったことをちょっと後悔しているところだった。警察に見つかって補導されたらどうしよう。学校にも連絡行くんだろうな。姉には黙って家を出てきてしまったし。なにやってんだろ、僕……

「待った?」

女の人の声が降ってきて、僕はひっくり返りそうになった。見上げると、昼間の街ではまずお目にかかれないやたらと短いタイトスカートに淡いクリーム色のジャケットを着た依林さんが、ちょっと腰をかがめて僕の顔をのぞき込んでいた。

「ごめんね。大丈夫なの?　こんな時間に。てっきりヒロくんが来るもんかと思ってた」

「ヒロさんは……えっと」

「わかってるよ。嫌がったんでしょ?　今度わたしのかわりに一発殴っといてくれる?」

依林さんはそう言って笑った。

「ここじゃなんだし、ファミレスでも行こう」

彼女は僕の腕を取って歩き出す。その仕草があんまりにも自然で、僕はどぎまぎしながらも腕を引かれるままについていく。

でも、じきにそれに気づいた。依林さんの歩き方がちょっと不自然なのだ。よく見ないとわからないくらい腰を曲げていて、歩幅がそろっていない。
「あの、……具合悪いんじゃないですか？　お腹かどこか」
「あれ。わかるの」と彼女は横顔で苦笑する。「まあ、わたしは商売道具だから顔だけは殴られなかったけどね」
「え……？」
「あんた、逃げたんだって？　だめだよーせっかく知り合いのふりしたのに。言い訳作るの苦労したよ。あいつら全然こっちの話信じないし」
「あ、あの、革ジャンとパンチパーマですか？」
「そう。うちの店のケツ持ち。メオが戻ってこないかどうか見張ってるの」
　ケツ持ち？
「みかじめ払ってるやくざ。なにするかわからないよ、あいつら。だから、しばらくは絶対に戻ってきちゃだめだってメオに言っておいてね」
　やっぱりやくざだったのか。なんでやくざがメオを捜してるんだろう。僕がさらになにか訊こうとしたとき、後ろから声がかかった。
「お待たせ」
「どうしたのその子」

振り向くと、依林さんと同じようなかっこうをした女の人が二人、建物の間を抜けてこっちに歩いてくるところだった。

深夜のファミレス、他に利用客の姿もない喫煙席のいちばん奥のテーブルで、僕はお水のお姉さん三人に囲まれて小さくなっていた。依林さんは大盛り鉄火丼をかきこみながら、「で、あんたは一体だれなの」と訊いてくる。

テーブルの上には他にもハンバーグセットだのあさりのパスタだのトマトシチューだのフライドポテトだのが所狭しと載っていて、僕はその食欲にちょっと圧倒されてしまう。三人とも細身なんだけど、この身体のどこにこれだけの食べ物が入るんだろう。

「メオとどういう関係なのヒロの知り合い？」

台湾出身だというホアさんが早口で訊ねる。

「中学生？　高校？」と、僕の隣に座ったフィリピーナのジョリファさんがそれを遮るように質した。

「あ、高校生です」中学生に見えるのか。たまに間違われるけど。「えーと、説明しづらいな。ヒロさんから聞いてませんか、ラーメン屋の上にある探偵事務所のこと」

「あー」依林さんはうなずいた。「何度も聞いた。その探偵って女だよね？　どんな人？」

「どんな人、って……」

僕はアリスのことをほとんど知らない。年齢さえも。

「十二、三歳くらいのちっこい女の子ですよ。いつもパジャマ着て部屋にひきこもってます。口はすっごい悪いけどパソコン関係の腕は確かじゃないかな」

「え、うそ、そんなに若いの。なにそれ。意味わかんない」

依林さんは青ざめて。少しの間口をつぐんでいた。それから、最初の煙草に火をつけてかなりわざとらしく一服し煙を大きく吐き出す。

「ほんとにそんなに若いの？　だって探偵でしょ」

「んん。探偵は自称なんじゃないかな」

アリスの話を聞いたときの反応はこれくらいが正常なのかもしれない、とも思ったけど、ちょっと驚きすぎのような気もした。

「そうか、そんなのに負けたのか、わたし。うっわ、ヒロくんてロリコンだったのか。すごいショック……」

天井を見上げて、小声でつぶやく。かなり聞き捨てならない言葉だった。どういうこと？　それってつまり、ヒロさんが？　え、いや、そんなまさか。

「依林もあんなヒモのことは早く忘れなって」

なぐさめようと頭をなでたホアさんの手を依林さんは振り払って、質問を続けた。

「ヒロくん、まだその探偵の手伝いやってるんだ。で、メオはそこにいるの？」

「あ……はい」
今日の昼——いや、もう昨日か——メオがNEET探偵事務所にやってきたいきさつを、僕はかいつまんで説明した。あらためて話してみると、長い一日だ。
「メオが泊めてもらってるとこ、安全かな」とジョリファさん。
「んー。まあ」ミンさんは心強い。協力してくれればね。
「メオは、あたしらみんなの娘みたいなもんだから」ジョリファさんが続ける。「あたしもクサカベさんみたいな人と結婚してメオみたいな子がほしかった」
「あんたの旦那シャブ中じゃん。お似合い」ホアさんが冷やかした。
「もうやめさせたよ、クサカベさんがぶん殴ってくれた」
「でもまだ仕事見つけてないんでしょ」と依林さんが眉をひそめる。
「永住ビザ出たら放り出すよ」
そこからどんどん僕には理解できないどろどろした話になって、しかも英語と中国語とタガログ語が混ざってきたので、僕はいたたまれなさを痛感しながらアイスコーヒーをストローですすった。
「メオも草壁さんがどうしたか知らないの」と、依林さんが話を戻してくれる。
「全然なにも」僕は首を振った。メオから聞いた、昼間に突然かかってきた父親からの電話の話を伝える。
「クサカベさん、なにやっちゃったのかな」

「田原組ともめたのかな。でもあの人、もう大阪の組とは切れてるんでしょ」
「さっきうちの店にも連中来たよ。うちの店長、クサカベさんが関西にいた頃からの知り合いだからさ、すっごいしつこく訊かれてた。なにか預かってないか、とか。なんにも答えてやらなかったけど。ふん」
やっぱりあれは会社の金――いや、ひょっとするとやくざの金？
実際に今、メオの手元に爆弾級の大金があることは、ひとまず三人には言わないでおくことにした。知ることは死ぬこと、なんてアリスの言葉も思い出しながら、僕は口を挟む。
「あのう」
自分の手のひらに汗を感じた。しかし、これは訊かずにはおけない。
「ハロー・コーポって、えっとなんでしたっけ、企業舎弟？　やくざなんですか？」
「まさかまさか」と三人そろって首を振る。
「えっと。じゃあメオを捜してたのは」
「だからあれは田原組ってとこのケツ持ち。お水やってると、なにかゴタがあったときに困るからってんでやくざにお金払うの。ていのいいたかりだよね、ほんと。最近はそういうのとすっぱり手を切る店が増えてるんだけどさ、うちはねえ……ガイジン多いからね」
それで僕はますますハロー・コーポレーションという会社がわからなくなる。やくざとつながりがあったり、パブを経営していたり、その一方でかなり立派な社宅を出稼ぎの外国人女性に貸与していたり。

「詳(くわ)しくは知らないけど」と、依林(イーリン)さんは前置きする。「都心で夜の商売やってると、どうしてもそっちとは無関係じゃいられないってだけ。表向きは人材派遣(はけん)だし、ちゃんと日本語教室も開いてるし」

「あたしらもけっこういい給料もらってるしね」

「でもこっち来るときにかなり借金したからね。くにに送っても半分くらい持ってかれる」

「ぼったくりだよね」

「しょうがない。組合のおかげで日本にいられるんだし」

「組合?」と僕。なんかもう次々知らない話が出てきてついていけない。

「ハローは出稼ぎの女集めて共済(きょうさい)組合つくってるの。草壁(くさかべ)さんはその会長だから、自分もあそこに住んでるわけ。ビザ取りやすくなるし、あとは結婚(けっこん)相手を紹介したりとか」

依林さんの説明に、僕は引っかかりを覚える。ちょっと待て。

「それっていわゆる偽装(ぎそう)結婚……」

ジョリファさんとホアさんがそろって笑った。

「ちゃんと一緒に暮らしてるよ。仲良くしてないとビザ審査(しんさ)通らないからね」

「でもこれからどうなるんだろ。クサカベさん捕(つか)まったりしたら」

「チンピラみたいなのが代わりに来たら、わたしやめるかも。草壁さんが色々世話してくれたから我慢(がまん)できてたのに」

「依林はまだ独身だからいいけどさ……」
　僕を放置して再びどろどろしていく三人の会話を遠く聞きながら、僕は半ば放心してコップの中の氷をストローでかき混ぜていた。メオのお父(とう)さんの居場所について手がかりがないどころか、物騒(ぶっそう)な話が後から後から出てきてどんどん話がわからなくなっていく。
　冬の事件は、簡単だった。言ってみればすべてがガキの手の内で種(たね)を蒔(ま)かれ膨(ふく)れ上がりガキの手によって摘(つ)み取られた話だった。でも今回はちがう。
　アリスの手に負えるんだろうか。

　ファミレスを出たときには、心なしか夜の縁(ふち)が青みがかっていた。もう夜明けが近いのだ。歩道には僕らの他(ほか)は人影がないけど、車道はこんな時間でも行き交う車とバイクで騒(さわ)がしい。
「そういやあんたの名前聞いてなかった」と依林(イーリン)さんが言った。
「あ。藤島(ふじしま)です。藤島鳴海(なるみ)」
「どういう字?」
　依林さんが携帯を取り出したので、僕も携帯を出して自分の名前を表示させて見せた。
「あー。ミンハイ」
　中国語読みされた。なにかの漫画(まんが)で見たな、これと同じこと。

僕と依林さんたち三人は、夜明けの路上で携帯番号を交換した。
「ミンハイも、その、探偵を手伝ってるわけ」
「ええと。助手らしいです」
自分で言うのはちょっと恥ずかしい。
「そう。じゃあ、草壁さん見つけたら助けてあげて。やくざがどんな連中かはわたしらよりよく知ってるはずだから、草壁さんの方からもめ事起こすはずないよ。たぶんなにかせっぱ詰まった事情があったんだと思う」
それはどうだろう。少しずつばれないように金を抜ける手段が手近にあるとしたら、やるやつはやるんじゃないだろうか──そう思いながらも、僕はうなずく。
「もう、クサカベさんもメオと一緒にタイに逃げちゃえばいいんだよ」
ジョリファさんがぽつりと言った。
「そうね。いなくなられたらわたしらは困るけど、でも、こうなったらもう無事に戻ってくるなんて無理だろうし」
「ミンハイ、クサカベさんに逢ったらそう言っといて」
ホアさんが僕の手を握る。
「あの人もだいぶハローにこき使われてきたから、もうどこかに逃げてゆっくりしていい」
「そう……ですか」

「奥さんのお骨もタイに持って帰ってあげた方がいいしね……」

僕ははっとして依林さんの顔を見る。

異国の地で死んだ、メオの母親。

「メオをよろしくね」

三人ともからそう頼まれ、ついでに一回ずつ抱きつかれ、僕らは別れた。

依林さんたちが去った後も、僕はしばらくガードレールに腰掛けてぼうっと夜明けを眺めていた。眠気は胸のあたりにしこりになっていて、いっこうに頭まで上がってきてくれなかった。見下ろすと、駅の南口に向かって流れ落ちる坂道と、それに沿ってもやもやと夜空を脅かす街の光。

話は僕の予想を超えてきな臭くなっていた。どうしよう。依頼主も尋ね人もやくざに追いかけられているなんて思ってもみなかった。こんな事件で、僕なんてなんの役に立つんだろう。もう一度、あのとき追いかけてきたやくざのことを思い出そうとする。ああ、だめだ。次に逢っても絶対に逃げる。

アリスはなんで僕を助手にしたんだろう。最初はなりゆきだった。それはわかってる。でもエンジェル・フィックス事件が終わった後は？　僕が助手のままでいたいと言って、アリスがそれを受け入れたのだ。いったい僕なんかになにを期待していたんだろう。わからない。

鴉の群れがやかましく僕を取り囲んで急かした。考えていてもしかたのないことだった。

とにかくこれが僕の助手としての初仕事だ。

アリスの隣にいられるのかどうか——これで、決めよう。

冬の事件のときだって、僕にできることはなにもなかった。でも、アリスは僕を助手だと言ってくれた。どれほど馬鹿にしようとも、見捨てたりはしなかった。だから、最後に残ったどうしようもない可能性に、しがみつくことができた。

今も同じだ。

できることを、やるしかない。

ガードレールからおりると、尻(しり)の砂埃(すなぼこり)をはたき落とし、僕は歩道を歩き出した。

2

　眠れそうになかったので、なんとなく『ラーメンはなまる』に寄ってみることにした。早朝の店は、驚いたことにシャッターが半分ほど上げられて、潰れた台形の光が暗いアスファルトの上に漏れていた。かがんで店内をのぞき込むと、カウンターの向こうで三つ編みの髪がせわしなくあちこち飛び回っているのが見えた。メオだ。なにやってんだこんな時間に？

　お父さんのことをどう話したらいいのか、まだ考えがまとまっていなかったので、メオとは顔を合わせたくなかった。でも戸から離れようとした僕にメオはすぐに気づいて、鍵を開けてくれた。さすがに逃げ出すわけにもいかない。

「助手さん早起きだね」

「いや、寝てないだけなんだけど」

　脳味噌と裏腹に身体は疲れ切っているので、僕はカウンター席の真ん中の椅子に崩れ落ちるように腰を下ろす。

「ミンさんもまだ寝てるでしょ」

「ううん。ミンさんいつもこの時間はジョギングしてるんだって」

へぇ。さすが体育会系。

「つられて起きちゃったから、朝ご飯作ってるの。助手さんも食べる?」

　言われてみれば厨房(ちゅうぼう)にはいいにおいが漂(ただよ)っている。思わず僕は腹に手をやる。依林(イーリン)さんたちの食欲に気(け)圧(お)されてコーヒーしか頼まなかったけど、そういえば腹が減っている気がする。

「僕のぶんもあるの」

「うん。もうすぐできる」

　出てきた丼(どんぶり)には澄(す)んだスープと煮くずれたご飯、あさり、海老(えび)、その上から胡椒(ごま)と香料の葉っぱを振りかけてある。あんまり珍しい材料は使っていない(というかほとんど『はなまる』にあるものばかり)のだけれど、きちんとエスニックな香りがした。カーオ・トムというのだそうだ。タイ風お粥(かゆ)ってところだろうか。

　皿に盛った彩(いろど)り豊かなサラダっぽいのも出てくる。甘酢(あまず)っぱい不思議な味。ミントの香りもする。朝食にしては豪勢(ごうせい)だった。

「料理巧(うま)いね……」

「メオは花嫁(はなよめ)修業中だから」

　中華鍋(ちゅうかなべ)を洗いながらメオはそう言って微笑(ほほえ)む。どこまで本気なのかわからない。

「メオって今、何歳(さい)?」

「十四」

ニコ下か。でも僕よりずっと生活能力ありそう。
「じゃ親の許可があれば二年後には結婚できんのか。でも相手がいるわけじゃないんでしょ」
「いるよ。お父さん」
　僕はサラダの青唐辛子を気管に詰まらせて盛大にむせた。すぐさまメオが水の入ったコップを差し出してくれる。気が利くなあ、きっといいお嫁さんに、じゃなくて。
「……十四歳にもなってお父さんのお嫁になるのを夢見るのはどうかと思うんだ」
「なんで？　ちゃんと結婚できるよ、血つながってないから」
　え、そうなの？
「ほんとのお父さんはメオが生まれる前に死んじゃったの。今のお父さんとお母さんはタイで知り合って、あっちで結婚した後、メオを連れて日本に来たわけ」
　メオは肌の色はともかく顔立ちがぱっと見で日本人ぽくもあったので、てっきりハーフだと思っていた。
そうか。なら結婚はできるのか。って、そういう問題か？
　……そういう問題か。
　なにか間違っている気がしたので突っ込みたいが、どう言えばいいのかわからなかった。
「ヒロさんも、『戸籍抜いておれの養子になればお父さんと結婚できる』って教えてくれたよ。ムスメでしかもヒトヅマ！　とかって喜んでた」

なに考えてんだあの性犯罪者……。
「助手さんがなにをそんなにあわててるのかわからない」
そう言われてみると、自分でもわからない。いや、でもさ。でもさあ！
言葉にできない気持ちを粥で流し込むと、少し落ち着いてきた。なにもそんなにうろたえることはないか。僕の人生じゃないし。
「でもね、お父さんが結婚してくれるかどうかはわからない」
「そりゃそうだ」というかまず無理だ。「お父さんは何歳？」
「んー……三十八だったかな。でもマンションのお姉さんたちはみんなお父さんのこと、そんな歳に見えないって言うよ。あのね寝顔がヤマネコみたいですごくかっこいいの。寝てるお父さんの顔がいちばん好き」
わかんねえよ。どんな寝顔だよ。というか、寝顔がかっこいいって、はじめて聞く男のほめ方だった。色んな意味でレア。
「メオがまだ料理下手だった頃も、作ったのちゃんと全部食べてくれて。だからレストランでバイトして教えてもらうようにしたの、美味しい？　それ」
「うん。美味い」
焼きたてのプリンみたいな笑顔をつくるメオ。僕はほんの少しだけ、草壁昌也がうらやましくなる。こんな娘にあんな危険な金を持たせて、いったいどこでなにやってんだ。

本職のやくざまでからんでかなり危険な事態になっていることをどう説明しようかと、僕は気が重くなる。説得して警察に連れていくのがいちばんいいんだろうけど。

「ほんとはお母さんにいっぱい料理習いたかったな。きっとお父さんもお母さんの料理がいちばん好きだったと思う」

　メオの瞳(ひとみ)は遠いタイの空の色になる。母親はもう――いないのだっけ。

　でも性格のひねた僕は、そこで依林(イーリン)さんやジョリファさんが言っていた組合のことを思い出す。出稼(かせ)ぎ女性がビザをとりやすくするために日本人男性との結婚を斡旋(あっせん)。草壁昌也(くさかべまさや)も、そうだったのだろうか。

「写真で見たけど、昔のお母さんメオにそっくりだから。だから、お父さんも、きっと、メオのこと好きになってくれる、んじゃない、かなっ」

　メオの言葉はちょっとたどたどしく、自信なさそうになる。なんだかなあ。

「お父さんに言ってみた？　結婚したいって」

「ううん」

「戻ってきたら言ってみるといいよ」たぶんちゃんと叱(しか)ってくれることだろう。

「助手さん簡単に言うんだね。そんなことが簡単に言えたら、世の中の人はみんなあんなに苦労してないよ？」

　ふむ。その通りかもしれない。僕もこの冬の事件で、それを痛いほど学んだはずだった。他人事(ひとごと)になると忘れてしまうものだ。ていうか僕は早朝からなんで女の子とこんなわけのわからん話をしているんだろ

う。

「お父さんどこにいるのかな……」

厨房の椅子に腰を下ろし、流し台にあごをのせてメオがつぶやく。泣きそうな声だった。

「どこか心当たりないの」

メオは首を振る。

「昨日から何回も携帯にかけてるんだけど、つながらないし」

「あ、お父さんの番号教えて。携帯持ってるならアリスが居場所を調べられるかもしれない」

メオは目を丸くする。当然の反応だった。でも三年後くらいにはネットであらゆる携帯電話の位置が確認できてしまう時代が来るという予想があるらしい。すごい社会になりそう。

「そうなんだ。メオ携帯持ってないからよくわかんないけど」

今時珍しいな。

「子供は持たなくっていい、って。大人になったら、昔お母さんが使ってた携帯くれるって言ってた。でも、なくてもそんなに困らないよ？　お父さんにしか電話しないし」

メオはお父さんの番号をすらすら暗唱した。

「……ん？」

携帯を持っていない？

僕ははたと考え込む。あまりにも携帯電話が当たり前なので気づいていなかったけど、すでに草壁昌也の方からじゃメオに連絡が取れないのか。しかも、メオの方からの電話は不通。

これじゃあ、まるで——

「どうしたの、助手さん」

「え？　あ、いや、なんでもないごめん、番号もっかい教えて」

まるで草壁昌也はメオの居場所を知る気がないみたいだ、なんてことは、メオには言えなかった。

教えてもらった番号を自分の携帯に入れる。海の向こうから出稼ぎにやってきたお水のお姉さん三人に、逢ったこともない元やくざ。僕の携帯のメモリはたった一晩でどんどんカオスになっていく。

「依林さんたちに逢ってたんだよ、ついさっきまで」

「心配してた？」

「まるでお母さんみたいにね」

メオはくすり、と笑って、それから急に沈んだ表情になる。

「……家に帰りたいな」

ちょっと迷ってから、けっきょく彼女たちの言葉を伝えることにする。

「ジョリファさんがね。……お父さんが見つかったら一緒にタイに帰ればいいって言ってた。こんなことがあったら、もうどっちにしろマンションにも会社にも戻れないだろうし」

ひょっとすると会社に、どころじゃない。日本の社会に戻ってこられない。メオは僕の言葉を聞いてしばらくは流し台の中をじっと黙ったまま見つめていた。

「大丈夫だよ」

やがて目を伏せたままぽつりと言う。

「大丈夫。きっと戻ってくるよ。お姉さんたちも、お父さんがいないとさみしいだろうし」

いや、意味わかんないから。

「一度壊れたらもう元には戻らないんだよ、こういうのって」

「そんなことない」

即答されて、僕はむずがゆいような奇妙な感覚を味わっていた。最近どこかで似たようなことを言われた気がする。

ああ、アリスだ。彩夏のこと。『きみは奇蹟を信じないのかい?』

信じる信じないの問題じゃないと思うんだけどな。

そのとき僕の携帯が手の中で震え、『コロラド・ブルドッグ』のけたたましいギターリフを吐き出す。びっくりして落としそうになってしまった。

「……はい?」

『さっきからなにをぐずぐずしているんだい。来ているのなら事務所まで報告に来たまえよ。メオの隣人に逢ってきたのだろう』

やれやれ、もう起きてたのか。それともまだ起きてたのか。ほんとにいつ寝てるんだろう、こいつは。

「わかったよ。今行く」

ため息をついて携帯を閉じる。

「探偵さんは助手さんが近くにいるとわかるの？　不思議な力？」どんな力だ。

「このビル、外からはわかんないけど、あっちこっちに監視カメラがついてるんだよ。だれかが来るとアリスの部屋でモニタできるの」

「へえ」

メオは店内をきょろきょろ見回す。残念ながら店の中にはカメラはついていないよ。

「探偵さんは、恐がり、なのかな」

「たぶんね」

アリスはなにを恐れているんだろう。世の中全部？　だからひきこもっているのだろうか。

まあそれでもいい。だから僕でも少しは役に立つ。

✱

「目の隈（くま）がひどいね」
　ベッドの上でちらと振り向き、僕の顔を見るなりアリスは言った。明け方の街をうろついて冷え切った僕の身体（からだ）に、探偵（たんてい）事務所のクーラーの風はひどく厳しい。
「そんなに？」
「あの薬をやった後のことを思い出したよ」
　アリスに言われて、僕はエンジェル・フィックスの紅色（べにいろ）を思い出す。ひょっとして寝不足になるたびに鬱血（うっけつ）するんじゃないだろうな。かんべんしてほしかった。
「眠（ねむ）いのなら、眠れることを神様に感謝して目を閉じたまえよ」
　不機嫌（ふきげん）そうに言って、キーボードに向き直る。エアコンの駆動（くどう）音に、再び打鍵（だけん）のリズミカルな音が混じる。眠気（ねむけ）があるのは自覚できるのだけれど、今ではそれが上昇しすぎて頭の五十センチくらい上でわだかまっていて、今度はいっこうに降りてきてくれないのだ。
「アリスっていつ寝てんの」
　ふと思いついて訊（き）いてみる。ひきこもりだから、完全夜型なのかな。
「ぼくが眠るのは世界中の人間が眠ったときだ。ぼくを脅（おびや）かす可能性のあるだれかが目覚めているときに、ヒュプノスに瞼（まぶた）を預ける気にはなれないね」
「えーと……」

あいかわらず言ってる意味がよくわからない。

「つまりほとんど眠らないってことだよ。最長で一時間くらいかな。ある医師は病気だと言い、べつの医師は体質の一種だと言ってそれぞれ研究欲をむき出しにした。ぼくが家を出た理由の一つだ」

「はあ」大丈夫なのか、それ。

「厳密に言えば、ぼくの脳は不定期に半分眠（ねむ）ったような状態になっているらしい。ふん。不便きわまりないね。だからぼくの生涯（しょうがい）はベッドの上のささやかな面積に限定されるわけだ。モッガディートにしがみついて横たわっているときが、ぼくのささやかな安らぎの時間だよ。羽虫のひと羽ばたきで消し飛ぶような、ね」

アリスの隣（となり）に転がっている、彼女よりも一回り大きなクマのぬいぐるみ、モッガディートを見る。あれがないとアリスは眠れないのだといつだったかヒロさんは言っていた。あれは正確じゃなかった。

部屋にひきこもり、周囲をぬいぐるみで鎧（よろ）ってさえ、眠ることはできない。

それは、なんというか、立派な病気じゃないのか。

「ぼくとしては、平気で目を閉じて一日の三分の一を闇（やみ）に委（ゆだ）ねられるきみたちの方が不思議だよ。不安じゃないのかい。眠り（ヒュプノス）と死（タナトス）は兄弟だというのに」

「不安なのかな。そんなにまわりじゅうのものが怖い？」

「怖いよ」

アリスはようやくキーを打つ手を止めて、僕を見た。

「この世界に存在する、ぼくに理解できないもののすべてが、見えないところで蠢いて膨れ上がりぼくを蝕んでいくのが怖い」
「……そう」
　僕は思わずアリスから目をそらす。
　冗談で言っているのではないことが、僕にはよくわかった。
「だから、怖くないきみは、遠慮なく・だらしなく・いぎたなく眠りたまえ」
「いや、だから寝ないってば」
　僕はベッドの前に正座した。
「報告しに来たんだし」
「ふむ。そうだったね」
「やっぱりメオの家を見張ってたのはやくざだったよ。田原組ってとこ」
　依林さんとホアさん、ジョリファさんに聞いた話を繰り返した。
「……実に奇妙な会社だねハロー・コーポレーションは」
「なんの会社なのかよくわからないんだけど」
「表向きは人材派遣だよ。しかしその実、社員はほとんどが東南アジアや中国からの出稼ぎ女性で、風俗店経営が主な事業だ。セミナースクールにまで手を出しているのは、税金対策かなにかかな。暴力団がか

らんでいるとなると、四代目に訊いてみるのがいいだろう」

「ていうか会社のことなんてそこまで詳しく調べる必要あるの」

　メオの父親を見つけるのが先決なんじゃないだろうか。

「メオの持っていた鞄には二億円入っていた。どうしてだと思う？」

「……会社のお金を横領したんじゃないの」

「そういう意味ではないよ。なぜ現金で二億円も入っていたのか、という疑問だ」

　僕は首を傾げる。アリスの言いたいことがいまいちよくわからない。

「そんなに横領できるほど大きい会社じゃないってこと？　それとも現金であんなにあるのがおかしいってことかな」

「それもあるがそれだけじゃない。……まあ今はいい。あまりにも情報が不足している。とにかくね、ぼくが受けた依頼はメオを守ることと草壁昌也を助けることだよ。居場所だけ見つければいいという話じゃない。ハロー・コーポレーションでいったいなにがあったのかを調べなければ始まらない」

「……わかったよ」

　どうも、今回も僕にできることはほとんどなさそうだった。あるとしたら、哀しいニュースをメオに運ぶ役割くらいだろう。たとえば父親が犯罪者だと確定してしまったとき。

　こんなんで探偵助手って呼べるんだろうか。

「ともかく手がかりが少なすぎる。田原組の後手（ごて）を踏んでいるのは確実だよ、あちらの方が持っている情報が多い。だからこそ暴力団だからといって忌避（きひ）しているわけにはいかない。会社や組の動向を探れば、そこから草壁昌也（くさかべまさや）につながる糸が見つかるかもしれないのだからね」
「あ、そだ、お父（とう）さんの携帯番号聞いてきた」
「それはもう自前で調べた。通話履歴（りれき）も調べ始めている。こいつはけっこう時間がかかるからね。GPSでもついていればもっと楽に居場所がわかるんだが」
　僕はしょんぼりとうなだれる。アリスならさっさと調べていておかしくないだろうけど。通話履歴。携帯の通話履歴か。なにか忘れている気がする。なんだろう。僕は膝（ひざ）を抱（かか）えて、しばらくその引っかかりを頭の中でいじくっていた。でも出てこない。こうしてまた僕は、事件の真ん中にいながら間抜けに口を開けて、色々なものが取り返しのつかないことになっていくのを見ているしかないんだろうか。
「なにをいじけているんだい、きみは」
「いじけてなんかないけど」と僕は嘘（うそ）をつく。「僕にできることもなくなっちゃったな、と思ってさ。せっかく春休みなのに。バイトも金土だけでいいっていうし」
「ぼくがこんなことを言うのも説得力がないかもしれないがね」
　アリスは肩（かた）をすくめた。

「探偵助手なんて立場にそこまでこだわるのはよしたまえ。背伸びをしようが逆立ちしようがきみは高校生だ。どうせ学校を出ればニートになる宿命なのだから、それまで自分のささやかな人生を大切にした方がいい」

「うわぁ……」

僕は手のひらで顔を覆った。

「雇い主にそんなことを言われちゃうと、ささやかな人生の猶予期間をせせこましく生きている僕としては、これからなにをすればいいのかわからなくなる」

「彩夏の見舞いにでも行きたまえよ」

僕の肩がびくっと震えた。アリスは冷たい目で僕をにらむ。

「きみはどうして彩夏の名前を聞くといつも身構えるんだい。友人を見舞うのがそんなにいやなのかい？」

「いや、なわけじゃ……ない。……けど」

あれ以来、彩夏の入院している病院には一度も行っていなかった。眠ったままの彩夏を見るのはつらかった。あの日、彩夏の瞼を開かせた奇蹟が、実はなんでもない偶然だとわかってしまうのが怖かった。だから。

目の前のシーツに広がる黒い髪先が揺れた。

見上げると、アリスは声を立てずに笑っている。

「……なんだよ」
「いや。ぼくときみはよく似ているな、と思ってね」
　僕は首を傾げる。
「すまない。これは自嘲だよ、気を悪くしないでくれたまえ。起きたかどうかもわからない奇蹟が壊れるのを恐れるきみと、ありもしない世界中の敵意におびえるぼく。きみはぼくを嗤わなかった。だからぼくもきみを嗤ったりはしない」
　僕はしばらくアリスの言葉を頭の中でかき混ぜた後で、ふと顔の緊張を解いて、うなずいて見せた。
　それからアリスは僕に背を向ける。ぱたぱたとキーを叩く音が心地よく僕の耳を打つ。
『助手さん簡単に言うんだね。そんなことが簡単に言えたら、世の中の人はみんなあんなに苦労してないよ？』
　メオの言葉を思い出す。その通りだった。
　眠気がやってきたのにも気づかないまま、僕はベッドの端に突っ伏して眠りに落ちた。

✲

　ピンクと紫の熊の大群に追い回される夢を見た。
「――ぅわぁッ」

自分の奇声で目を覚ます。

頭を起こそうとすると、後頭部や肩に乗っていたなにかがぼてぼてと床に落ちた。目の前にはつぶらな黒ボタンの瞳。思わずのけぞる。ぬいぐるみのクマだと気づくのにかなり時間がかかった。

肩から毛布が滑り落ち、急に寒さを覚えて身震いする。ベッドの端に上半身だけもたれて眠ってしまっていたのだ。なぜか僕の周囲は大小さまざまなぬいぐるみで埋め尽くされている。

「やっと起きやがったよ」

顔を上げると、すぐ隣、ベッドの端にテツ先輩が座っていた。空調から吹き下ろす冷風の中でも、Tシャツ一枚。分厚い胸板と二の腕は夢に出てきた熊を思い出す。

「え……と」

「寝ないなどと言いながら、話が終わったとたんにしっかり熟睡するのだから、きみもなかなかに豪傑だね。感心したよ」

ベッドの奥の方でアリスが不機嫌そうに言う。

ああ、あの後眠っちゃったのか。立ち上がろうとすると、僕を取り囲んでいたぬいぐるみの壁がさらにぼろぼろと崩れる。

「……このぬいぐるみはなに?」

「眠りながらパトラッシュがどうのこうのとつぶやいていたから毛布をかけてやったのだが、それでもまだがたがた震えていたのでね。あいにくとぼくの部屋には他に防寒具がないし冷房をゆるめる気も毛頭な

い。こんなところで凍死されても困る」
　そう言ってアリスはぷいとモニタの方を向いてしまう。僕は不思議な面もちでそのパジャマの背中を見つめた後、背中にかかった毛布をつまみあげた。アリスがこんな気遣いをしてくれるやつだとは思ってもみなかった。というか、怒ってんのかな。不安で眠れないというアリスの痛切な告白を聞いた後に、ばったり眠っちゃったから……。
「あの、アリス──」
「じゃあナルミも起きたし、組にはナルミに行ってもらった方がいいんじゃねえの」
　テツ先輩が無情にも僕の言葉を遮った。
「ああ、そうだね。その方がいい」
　組？　ってまさか田原組のことじゃないだろうな。
「平坂組に協力を頼みたいのだがメールが不通でね。どうもマシントラブルがあったらしい。テツよりはきみが適任だろう、行って話をするついでにPCを見てやってくれたまえ」
　ああ……平坂組の方か。またあの組事務所に顔を出さなきゃいけないのか。
　でもしかたがない。たしかに僕が適任だった。ひとまずやることができたので、ようやく眠気が薄らぐ。
「俺は署の方に行ってくるよ。他にもやくざの心当たりいくつか回ってみる」
　テツ先輩は警察に知り合いがいるらしいのだ。

「しかし今回はそもそも事件になっていないのだろう。むしろハロー・コーポでなにかあったと警察に知られてしまうと、依頼主（ぬし）の意向に反する。なにか動きがあるのなら是非（ぜひ）にも知りたいところだが、どうするつもりだい」
「まあなんとかする。ほら行くぞナルミ」
　テツ先輩に引きずられて僕はまだしぶとい眠気を抱（かか）えたまま事務所を出た。

　外に出ると、あたりがぎりぎりとまぶしかった。もう昼近いだろうか。太陽が黄色いってこれのことか。これから夜更かしはひかえよう……。
　テツ先輩に襟首（えりくび）をつかまれて非常階段を下りる。え、なに？　なんか怒ってない？　僕なにかしたっけ？
「あの、先輩」
「おまえアリスの部屋で二度も寝たんだよな……」
　先輩がぼそりとつぶやく。そう言われてみればそうだ。前回は、眠ったというよりも薬で意識が飛んでいたんだけど。でも、それがどうしたんだろう。
「なんでかなあ。なんかあんのかな、おまえ」
　テツ先輩は僕の方を見ないままぶつぶつつぶやいている。さっぱり意味がわからない。

「まあいいや」
　階段を下りきって勝手口前まで来て、ようやく先輩は僕を振り返った。
「それよりナルミ、金貸して」
　話がつながってねえ。
「まっぴらごめんです」
「頼むって。桜花賞は自信あるんだよ。倍にして返すから」
「そもそも金ないですから。アリスに借りたらどうですか。あいつけっこう金持ちでしょ」
「そんな恥ずかしい真似ができるか」
　僕に借りるのは恥ずかしくないのかよ！
「やれやれ。今回の事件、いくらもらえんのかな……」
「テツ先輩、事件の話だいたい聞きました？」
「おまえが寝てる間に全部聞いたよ。メオのこととか、ボストンバッグのこととか……あ」
　テツ先輩の目が不意に見開かれた。その一瞬、僕には彼の考えていることがわかった。
　先輩よりも先駆けて勝手口から厨房に飛び込み、「なんだうるせーぞナルミ」と文句を飛ばしてくるミンさんの隣をすり抜けて奥の家にあがる。メオは廊下にあぐらをかいてボウルを抱え、生クリームにハンドミキサーをかけているところだった。

「メオ、あの鞄隠して！」
「へ？」
いきなり言われてメオは面食らった表情を見せる。と、僕を後ろから押しのけて先輩も廊下にあがってきた。
「メオ、ものは相談なんだが金貸してくれ」
「だめです。お金の貸し借りは絶対にするなってお父さんに言われてます」
「じゃあ、貸さなくていいから投資してくれ来週の桜花賞で最低でも二十倍になる」
「ちょ、テツ先輩なに言ってんですか」
「おうかしょー？」
「そう。馬が十八頭くらい並んで一分半でトラックをぐるっと一周するとお金が増える」
あんたその説明省きすぎだから！
「おぅ。競馬ですね。お父さんもいっぱい話してくれました。昔、組にいた頃は、金曜日になるとそういうやばい人がけっこう借りに来たので、だいたい目を見ればわかるようになっちゃったそうです」
メオがその澄んだ瞳で下からえぐり込むように見つめてくるので、さしものテツ先輩もたじろいだ。僕も口を出せなくなる。
緊迫した時間は、後頭部に炸裂した痛みで遮られた。目の前に真っ白な星が散る。

「なにやってんだおまえらは。ナルミも今日はバイトじゃないだろ。邪魔だから出てけ」
　ミンさんは僕とテツ先輩を殴ったその手で襟首をつかむと、勝手口の外に放り出した。なんで僕まで殴られなきゃいけないんだ！　なんて抗議するひまもなかった。

✲

　平坂組は自称・任侠団体で、つまりなにをやっているのかというと、街でガキが起こしたもめ事を（なるべく）平和裡に収めるべくにらみをきかせているのである。平たくいうと不良系ニート。
　この街にはいくつも、平坂組の代紋を掲げたクラブやスポーツショップ、ブティックなどがある。よくよく注意して看板の下なんかを見てみると、平氏の伝統的な家紋である揚羽蝶紋がプリントされたステッカーが貼られていることがある。
　こうした店のいくつかには起業から平坂組が関わっているらしい、というのが僕ら高校生の間に流れているレベルの噂。実際には、尽力したのは組長である四代目だけで、普段から忙しく街中を飛び回っているのも四代目だけ。他の組員はだいたい事務所でひまそうに管を巻いているのが常らしい。
　そんなわけで僕がその日、ガタピシいうエレベーターでオンボロビルの三階まで上がり、平坂組の看板を掲げた鉄扉をおそるおそる開いたときにも、狭い事務所の中にはそろいの黒いTシャツを着た組メンバーがうじゃうじゃたまっていた。

「あのう、アリスに言われて来たんですけど……」
　僕を見るなり、ほとんど全員がソファから立ち上がる。八人くらいいるだろうか。
「あ、兄貴、お疲れさんス！」「お疲れさんス！」
　全員僕より年上のはずなんだけど、前回の事件で色々あって以来、僕はなぜかここの組員から兄貴と慕われて(?)いる。平坂組のメンバーはそろって体格がいいので、一斉に礼されると思わず身を引いてしまう。
　ただ、組員中でも飛び抜けてごつい電柱と岩男の二人の姿はなかった。ということは四代目は外出中か。あの二人はボディガードだからたいてい一緒だもんな。
「お待ちしてました、早めに頼みます」
「え、な、なに?」
「あぶねえとこだった」
「兄貴が来てくれたから一安心」
　よくわからないまま僕は事務所の奥の薄暗い書斎に引っ張り込まれる。ロッカーや書架や仮眠用のベッドのさらに奥に小さなデスクがあり、旧式のPCがぼうっと光を放っていた。
「いやあまあなんというかその動かなくなって」組員の一人が言う。
「叩いても、ひっくり返しても、コンセント引っこ抜いてもっかいつけても直らないんで、もう姐さんか兄貴に頼むしかないかなと」

叩(たた)いて直そうとするなよ。壊(こわ)れたらどうすんだ。

画面の中ではエクスプローラのウィンドウがいくつもいくつもいくつも新しく開かれ続けて、タスクバーはすでに細切(こまぎ)れになっている。最近出回っている、挙動が派手(はで)でほぼ再起不能になるというので有名なウィルスだった。でも、よっぽどのことしなきゃ感染しないはずなんだけどな。

「どこで拾ったんですか、このウィルス」

「え？　いやあ。さっぱり」

メンバーはなにか意味ありげな照れ笑いを交わす。

「技術的には大したことがないから、まず引っかからないって聞いたんだけど。ネットでなにかしました？」

「え、いや。いやいやなんもしてませんよ」

「エロいホームページなんてもちろん探してません」

「『金髪(きんぱつ)巨乳無修正１８０分』なんてクリックしたりしてませんて」

僕はため息をついた。チャイルドロックかけておけばよかった。

「これ、もう再インストールするしかないと思うんですけど。中のデータ消えちゃいますけどしょうがないですよね」

「えっせっかく見つけたのに無修正サイト」

「馬鹿おまえ喋(しゃべ)るな」

「い、いいですよお願いします壮(そう)さんが帰ってくる前に」

ああ、四代目が帰ってくると怒られるから焦ってるのか。再び深いため息をついてから、僕はＰＣの前に座った。

四代目が事務所に戻ってきたのは、僕が組メンバーに囲まれて「すげえ、さすが兄貴！」「兄貴のマウスさばきが速すぎて見えねえ！」とか言われながらＯＳを再インストールしている最中だった。ていうかおまえら黙ってくれ気が散るから。

「お、お、お疲れさんス、壮さん」「お疲れさんッス！」

玄関の方で声がして、僕のまわりにいた組員たちもあわてて迎えに出る。

「なにしてんだ園芸部」

書斎に入ってきた四代目は僕をにらんで言った。触ったら指が切れそうなくらいきつい目つき。中華風の派手な刺繡を施した深紅のジャケットも、普通の若者が着てたらギャグにしか見えないけど、この人が羽織っていると真剣に怖い（ちなみに最近知ったんだけどこの刺繡は四代目が手ずから施したそう。手芸がプロなみに巧いというのはほんとうだった）。後ろに控えるのは岩男と電柱、平坂組が誇る横幅最大と縦幅最大の二人。

「……えーと。PCにトラブルがあったって聞いて」
　四代目の背後でメンバーが両手を合わせて僕に向かって頭を下げるので、その原因については黙っていることにした。
　四代目は舌打ちして僕のすぐ後ろの低い書棚の一つに腰を下ろす。
「うちの馬鹿どもが世話になるな」
　ものすごく嫌そうに礼を言われてしまった。
「あの、それで、どうせなら使用制限かけて変なもの拾わないようにしたいんですけど、四代目だけ解除できるようにするんでパスワード決めてください」
「四代目って呼ぶなっつってんだろ」すごまれた。じゃあなんて呼べばいいんだよ。またヒナちゃんて呼んでやろうかな。殴られるだろうけど。
「俺はそういうのよくわかんないから勝手にいじれよ」
「いや、でもだれか一人は全機能使えないと」
「兄貴が使えるようにしとけばそれでいいじゃないスか」と電柱が言った。
「僕、組員じゃないですよ……」
　PC使う用事があるたびに呼び出されても困る。

「壮さん、どうスか、このさい兄貴と正式に盃交わしたら」と岩男。僕は目をむく。なに言ってんのこの人！　四代目も眉をひそめて岩男を振り返る。でも、組メンバーたちはそんな僕らの反応などおかまいなしに色めき立った。

「兄貴ならパソコン詳しいし頭いいしな！」

「度胸あるし」「兄貴になら一生ついていきます」

　ちょっと待てなんだこの流れは。かんべんしてください。

「黙れ」

　四代目の一言で、興奮していたガキどもはいきなり沈黙する。

「なに考えてんだおまえらは。こいつまだ高校生だぞ」

　ニートじゃないやつは組に入れない、というのが組長の固いポリシーらしかった。僕だって入りたくない。ところが岩男がこんなことを言う。

「そ、そうなんですか。でも、テツ伯父貴や少佐に聞いたところによると、出席日数足りなくて赤点取りまくってもう中退確定だって」

　でたらめ吹聴すんなよあの二人はもう！

「兄貴が組に入ってくれれば即戦力」

「うるせえ。おい園芸部、そっちの作業終わったんならさっさと本題出せ」

「……あ、は、はい」

僕はアリスから預かった一枚のプリントアウトを四代目に渡した。精悍な顔をした男の正面写真。メオの父親──草壁昌也の写真だった。依林さんが以前、携帯のカメラで撮ったのが残っていたので、回してもらったのだ。四十手前にはとても見えない。

前の事件のときと同じように、顔写真を僕がさらに加工して顔の特徴をディフォルメしてあるので、たしかに猫系に見える。

受け取った四代目は、写真をちらと見ただけで、後ろの一人に渡す。

「五百枚くらいコピーしてこい」

「押忍、男磨かせてもらいますッ」

こまごまと指示を与えると、メンバーたちはそれぞれ部屋を出ていく。さっきまでのアホっぷりからは考えられないてきぱきとした動き。組長がいるだけで引き締まり方がちがう。

書斎に残っているのが二人だけになると、四代目がようやく僕に向き直って言った。

「とりあえず写真はこのへんのガキにばらまいて捜させるけどな、あてがないんだから張り込みとかはできねえぞ。漫喫とかサウナくらいはチェックするけど。そのへんアリスはわかってんだろうな」

「それでいいって言ってました」

むしろアリスは、ハロー・コーポレーションの方を詳しく探りたがっている様子だった。部屋にひきこもるニート探偵としては、地道に街を捜し回るような方法よりも、組織の網伝いに情報をたどっていった方が早道なのだろう。

「ハローは起業するときに闇金（やみきん）に手を出してるようなとこだぞ。怪我（けが）したくないなら、その女と金はさっさと警察に突き出して手を引け」
「闇金……て、なんですか」
「まともな銀行から借りられないやつに年利一〇〇〇パーとかアホな金利で貸してる金融だよ。そういう連中の間では重宝（ちょうほう）がられてんだ。今でも田原（たばら）組とべったりだ。関わるな」
　やっぱりまともな会社じゃなかったのだ。僕は『ハロー・パレス』で追いかけてきたあの二人をまた思い出して、身震いする。あのとき、捕（つか）まっていたらどうなっていたんだろう。怪我だけでは済まなかったかもしれない。でも――
「でも、依頼されたから、って」
「依頼されたらだれでも助けんのか。身内でもねえのに」
「四代目は、身内じゃなきゃ助けないんですか」
「俺（おれ）が無条件で手を貸すのは、身内とそのダチまでだ。どこかで線引いて見捨てなきゃやってられないだろ。せっぱ詰まってるやつがこの街に何百人いると思ってんだ」
　世界中に六十億（おく）人くらいいるだろう。それを全部救うことは、たとえ神様にだってできない。でも。
「……アリスは、全員助けることを本気で考えてますよ」
「知ってるよ。あいつは馬鹿だ」
　いつかアリスが言っていたことを思い出す。

『無力さから逃げ、ぼくの無能さゆえに失われ続ける世界から逃げ……それでも答えは見つからなかった』

　同情でも哀れみでも正義感でも優しさでもなく、ただ自分の無力さを否定するためだけに、探偵は依頼者を脅かす謎を解体しようと試みる。

「テツもヒロも喜んでつきあってるんだからな。馬鹿ぞろいだ」

　四代目は大きく息を一つ吐くと、立ち上がった。

「それで、おまえはどうなんだよ」

　ぐさりと言われる。僕はどんな理由で動いているのか。四代目はそう訊いているのだ。僕は情けないことに返答に詰まった。

「……僕は、アリスの助手ですから」

　ようやく絞り出したのは、そんな言葉。答えになっていない。

　でも四代目はたぶんわかっていたんだろう。ものすごくくだらない理由だってことが。

「素人が無理すんな。なんかゴタがあったらこっちも迷惑なんだよ。きな臭くなってきたらすぐ俺に言え」

「あ、……はい」

　書斎を出ていこうとした四代目を、僕はふと呼び止めていた。振り向いてにらまれたので、なんで呼び止めたのだろうと一瞬後悔する。

「なんだよ」

「……四代目は、なんで手助けしてくれるんですか」

身内でもないのに。

「おまえじゃなくてアリスを手伝ってんだよ」

それもそうか。

「それに、おまえには借りがある」

僕はしばらくぽかんとして、四代目の口元のあたりを見つめていた。

「……え、いや、だってあれはもう」

「俺が借りがあるっつってんだからあるんだよ。おまえが決めることじゃないだろ」

なんですごまれなきゃいけないんだろう、と思いながらも僕は萎縮する。

「とにかく用が終わったならさっさと出てけ」

四代目と一緒に事務所を出ようとしたとき、携帯が『コロラド・ブルドッグ』のイントロをわめき散らした。

『悪い報せだよ。ハロー・コーポの経営している店をいくつかヒロに回ってもらったが、どこも追っ手がかかっている。やはり草壁昌也は金を持ち逃げしたものとして追われているね。あるホステスが、「二億円入るような大きさの鞄」云々というやくざの会話を聞いている。連中がメオも追っていると見て間違いない』

まるで最初からわかっていたことみたいに、アリスは冷たい口調で告げた。

「……どうするの」

『どうするもこうするも、ぼくは依頼を完遂するだけだよ。草壁昌也を確保してメオに引き渡す。そこから先はメオが決めることだ。犯人蔵匿は親族であれば罪にならない』
「うん……」
　煮え切らない気持ちで電話を切った。メオにこのことを伝えるのは、やっぱり僕の役目なんだろうか。
　四代目が僕の背中をどんと突いて、鉄扉の外に押し出すと、事務所の扉に鍵をかけた。
「おまえはこういうのに向いてない。やめとけ」ぼそりと言われる。
「どうして……ですか」
「ゴタがあったときにいちばん大事なのは、どこまで腹をくくるか最初にすぱっと決めとくことだ。それができないやつが現場にいると邪魔なだけだ」
　エレベーターを待つ間、僕は四代目の言葉を嚙みしめていた。四代目の線引きは明確だ。身内とその友達まではなにがあっても助ける。あとは知らない。じゃあ、僕はどうだ？　たとえば、メオが犯罪者である父親を、それでもかくまってくれとか、逃がすのを手伝ってくれと言い出したら、どうする？
　わからなかった。たぶんアリスに判断を預けて、僕は見ているだけなんだろう。助手だから、というのは情けないくらい便利な言葉だった。
「だからおまえはだめなんだよ」
　四代目が言って、ちょうどそのとき開いたエレベーターの扉の中に僕を蹴り入れた。
「……なんか、今日は親切ですね」と尻をさすりながら言ってみた。

「あァ?」

ぎろりと剝かれた狼の目に、僕は首をすくめる。決断力がないくせに、いつも一言多い。たしかに邪魔なだけだった。わき上がってきた激しい自己嫌悪は、下降するエレベーターの加速度が肺の中に無理矢理押し込んでしまった。

ビルを出て四代目と別れ、僕は坂をとぼとぼと下った。渋滞した車道にぶつかり、ガードレールに手をついて息を吐き出す。雑用一つ終わり。それでもまだ雑用が残っているのはありがたかった。役立たずを自覚せずに済む。

✲

「ミンハイ!　こっちこっち!」

車道を隔てた向こう岸、人がぎっしり鈴なりになった歩道の端で、依林さんが僕を見つけて携帯を持った手を振った。日曜日の昼間、いつも通り通行人でごった返す駅西口前のバスロータリー。待ち合わせ場所を指定してきたのは依林さんだった。夜とはちがって、肩が大きく開いた辛子色のサマーセーターにジーンズというラフなかっこう。

「尾けられてない。大丈夫だと思う」

僕のいる側へ渡ってきた依林さんは、そう言うなり、腕(うで)をからめてくる。無警戒だった僕はびっくりしてつんのめりそうになる。
「あの連中、メオのことも必死で捜(さが)してるみたいだからね。気をつけないと」
「え、あ、はい」
「お昼まだでしょ？　おごるよ」
あんまりお腹(なか)が空(す)いていなかったので、ドトールに入った。昼時なのでさすがにかなり混んでいる。僕がカフェオレとロールサンド一つで遠慮(えんりょ)し、奥の方の窓際の席を確保していると、依林さんは例によってトレイの上に食べ物山積みにしてやってきた。
「じゃ、これ頼まれてたメオの服」
「どうもすみません」
向かい合って座り、大きな紙袋を受け取る。けっきょく昨日(きのう)はメオの家には入れなかったので、依林さんに鍵を預けて服を取ってきてもらったのだ。
「出かける直前に組のやつらがまた来たよ。わたしなんて隣(となり)の部屋でしょ。もうしつこくてさ。急いでるからって逃げてきたけど」
「なに訊(き)かれました？」

「前の日になに話したとか、なにか受け取ってないかとか、隠(かく)れ場所知らないかとか。メオのことも訊かれた、仲良かったのあっちも知っててさ。やっぱりメオも警察に行った方がいいのかな。でもメオも面倒なことになるし……いや、行かないともっと面倒か……ううん」

「警察はメオが嫌(いや)がるんです」

「わたしも警察は嫌(きら)い」

依林(イーリン)さんは顔を伏せて横に振る。

彼女たちにとって、日本の警察は単純に『自分たちを守ってくれるもの』なんかじゃないのだろう。でもなあ。

僕はちょっと迷ってから、けっきょくメオの持っていたボストンバッグのことを話した。依林さんは額(ひたい)に手を当ててため息をつく。

「じゃあそれって、横領(おうりょう)してたの確定ってこと?」

横領した金を自宅の金庫に保管し、それが露見(ろけん)したから、娘(むすめ)に電話して持ち出させた。筋の通った、わかりやすいストーリーだ。これが真実だとすると、メオは(故意ではないにせよ)証拠(しょうこ)隠滅(いんめつ)に荷担(かたん)していることになるな、と僕が思い始めたとき、依林さんがふと言った。

「ねえ、それわたしらの今月の給料じゃないかなあ」

「……え?」

「わたしら、いつも草壁（くさかべ）さんから給料手渡しだもん。自宅にいくらか現金があっても不思議じゃないよ。それに、ボストンバッグだっけ？　わたしそれ見たことある」
「え。ほんとですか」
「うん。クサカベさんがたまに会社にボストンバッグ持ってってた。わたしら通信で日本語習ってるからさ、テキストはクサカベさんが毎月集めてんの。それ会社に持ってってるんだと思ってたけど」
　じゃあ、そのついでに、帰りには給料を入れて持って帰って来てたのか。
「いや、でも、……二億（おく）円ですよ？」
「だってあのマンション全部社員だし、ええと」
　依林さんは宙（ちゅう）をにらんで指折り数えていたが、やがてため息をついた。
「さすがに二億円は必要ないか」
　というか、今時給料を手渡しなのか。変な会社だ。
「みんな、ひょっとして銀行口座持ってないとか」
「馬鹿にするな」と依林さんは笑って僕の額をつつく。「もらったお金はちゃんと銀行に入れてるよ。自動引き落としで色んなところからいっぱい引かれるからね。実家にも送らないといけないし、半分も残らないよ。なんだか無駄（むだ）な仕組みだよね」
「じゃあ、なんで手渡しなんですか」
「さあ。わかんない」

「ひょっとして」横領しやすくするため、とか。
たとえば給料だったにしろ、娘を使って自宅から持ち出させて自分は逃げてるんだから、後ろめたいことをやっていることにちがいはない。
「ミンハイはなんでも疑うんだね」
ええと。
「……探偵、助手ですから」
依林さんはからから笑う。その笑いもすぐにしぼんでしまった。
「なんであの人も娘にそんな危ないことさせるかなあ。ヤー公にも追い回されるし」
「……なんでやくざもメオを捜してるんでしょうか」
「なんで、って」
「だって会社のお金だとしたら、やくざは関係ないですよね」
「会社のだれかが頼んだんじゃないの?」
「それなら警察に通報すればいいのに」
「えー?　うーん。それもそうか」
依林さんはストローをくわえて再び虚空をにらむ。

「表沙汰にしたくないのかな。それともうちの会社のお金じゃなくて、組の金だったとか？　でも草壁さんが組の金に手出しできるわけないし……わかんないなあ」

僕は『ラーメンはなまる』の厨房裏で楽しそうにクリームをホイップしているメオのことを思い、ぞっとする。なにも知らない少女が、爆弾のような札束を抱えて、今、僕らの腕の中にいるのだ。

「メオを守ってあげてね」

依林さんがつぶやく。僕はうなずいた。自信はないけど。

＊

『ラーメンはなまる』に戻ってきたのは二時くらいだった。なんか、ここに住んでるみたいだな、最近の僕。そういや丸二日家に帰っていない。そろそろ姉になにか言われるかも。

その日は珍しく、もうすぐランチタイムが終わるというのに客が三人もカウンター席で粘っていて、ミンさんも中華鍋を相手に忙しそうだった。

勝手口からミンさんの家にあがって倉庫や居間を捜してみたけど、メオの姿がない。

「ミンさん、メオどこ行ったんですか？」

火から目をそらさず、背中越しにミンさんが答えた。

「あ、メオならアリスんとこに行ってる」

「ええ？」

３０８号室のインタフォンを押しても、しばらく反応がなかった。いつもなら青ランプが灯るのだけれど、そのときはかわりに中から水音が聞こえた。

水音？

やがて、「はーいはい待ってて開けます」という声がするので、僕はびっくりして一歩後ずさる。メオの声だ。

ドアを開いて顔を出したメオの髪は濡れていた。ほんのり上気した肌からは石鹸のにおい。胸から下を隠すのはバスタオル一枚だった。僕は玄関のノブを握ったまま、しばし固まる。

「メオ、確認せずに開けるのはやめたまえ無防備な！　それからぼくの髪はまだすすいでない、早くしてくれたまえ、わ、シャンプーが目に入ってきた、メオ！」

泣きそうなアリスの声が奥から響く。

「はいはい。あ、それひょっとしてメオの着替え？」

僕の手にした紙袋を指さす。

「えっと、あ、あ、う、ん」

「ありがとっ。探偵さんが怒ってるから閉めるね、助手さんも中でちょっと待ってて」

いや外で待つよ、と言おうとしたら紙袋をつかまれて部屋の中に引っ張り込まれた。入ってすぐ右手のバスルームに電灯がついていて（はじめて見た）、泡まみれになった長い黒髪がちらと見えたので僕はあわてて壁にへばりつくようにしてそちらに背を向ける。

「ごめんね、じゃあ流すよ?」メオはバスルームに戻り、磨りガラスの戸が閉まる音がした。

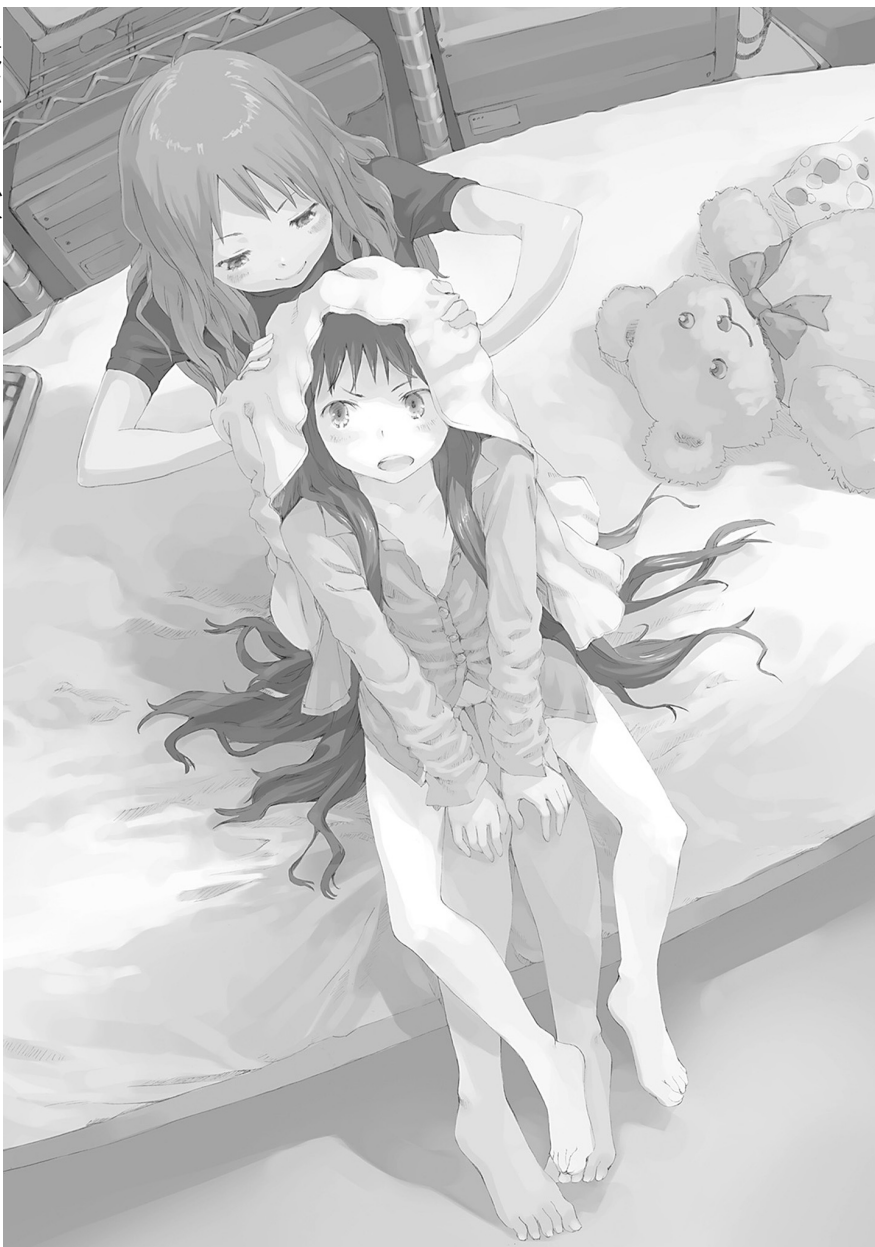
「探偵さん暴れちゃだめっ」

「うー、目にしみる」

湯気で煙る戸の向こう側から、二人のこもった声が聞こえる。

それまで生きてきた十六年間でも、そのときほどいたたまれない気持ちになったことはなかった。シャワーの音に包まれた、人生で最も長い六分間。

「わざわざぼくらの風呂が終わるまで待っていたということは、なにか報告があるのだろう。さっさとしたまえ」

不機嫌そうに言うアリスは、ベッドに腰掛けたメオの膝の上にちょこんと座っていた。もちろん二人ともすでに服を着ている。メオはアリスの頭にバスタオルをかぶせて髪をぐしぐし拭いていた。

「探偵さん髪長いから手入れたいへん」

「ほうっておけば乾く」

「そんな乾かし方したら変な癖ついちゃうよ」

……なんかこの場面見たことがあるぞ？　やっぱりみんなアリスを見るといじくりたくなるんだろうか。

「ナルミ、彩夏のことを思い出すのは後回しにしてさっさと報告を始めたまえよ！」

図星をさされて僕は首をすくめた。無駄に勘の冴えてるやつだほんとに。

「あやか？」とメオが首を傾げる。

「きみと同じようにぼくの髪をシャンプーしたりブラシかけたりするのが好きだった女だよ」

え、彩夏とも一緒に風呂入ってたの？

「探偵さんひとりじゃお風呂入れないんだって」とメオが言う。「いつもはミンさんが三日にいっぺんくらい一緒に入って髪洗ってあげてるらしいんだけど、今日はなんだか忙しいからメオが」

「いい迷惑だ。マスターも忙しいのならぼくの洗髪なんて忘れてしまえばいいのに」

知らなかった。ミンさんもけっこう大変だ。というかこいつ、ほんとに生活能力ほぼゼロなんだな……。

「ナルミなにしにきたんだきみは！　濡れ鼠のぼくを見て笑いに来たのかい？」

「あ、いや、ごめん」僕は顔の前で手を振る。二人があまりにも緊張感と無縁なものだから、用事を忘れそうになってしまった。

「依林さんにまた会社の話をちょっと聞いたからさ。伝えておこうと思って」

草壁昌也が『ハロー・パレス』の住人に給料を手渡ししていることなどを話した。たぶんあんまり事件とは関係ないだろうなと思いながらも話し終えたら、アリスの目つきが変わる。

「給料は全員手渡しだと、たしかにそう言ったのだね」

「……う、うん」

「なるほど。だとすると――ぐぇ」

「お父さん給料横取りなんてしないよ、ぜったい」

メオが後ろからアリスをきつく抱きしめて言った。

「は、放したまえ苦しい！　ぼくは横領したなどとは言っていないぞ」

アリスが暴れ、バスタオルが頭から滑り落ちる。

「でも、どう見ても……予想通りだと思うんだけど」

「短絡はやめたまえナルミ」意外にもアリスがメオの味方をした。「草壁昌也が横領したという考え方にはいくつかの疑問符がつく。まずもってして個人が二億円も詐取できるような会社じゃないということ。そして現金であるということ。それからもう一つはね、そもそも連中が探している二億円という金額と、鞄の中にある金額がほぼ一致していることだ。なぜ二億円あると知っている？　よしんば横領された金額が会社側から調べて二億円だと判明したとしよう、それならばなぜ全額残っている？」

「あ……」

そうか。たしかに、変だ。

「もちろん草壁昌也氏の趣味が貯金だったとか、あるいは一万円札のにおいを嗅ぐのが好きだったとか」

「お父さんそんな変態さんじゃないよ」「ある目的があってすべて貯蓄しておいたとか、あまりにも多額なので使うに使えなかったとか、様々な可能性も考えられるが、ここでもうひとつ否定材料がある。暴力団が独自で草壁氏やメオを捜しているという事実だね」

「じゃあ」あまり考えたくなかった、もう一つの推論。「田原組のお金をさ、二億円預かってて。それを持ち逃げ……」

メオの視線が頬に突き刺さる。

「その可能性もある。すると今度はなぜ暴力団の金を預かっていたのかという疑問に突き当たる。なんにせよ情報不足だ。考えるのはぼくの仕事だからきみは無駄な努力はやめて自分の仕事をしたまえ」

無駄な努力言うな。どうせ馬鹿ですよ。

「……僕の仕事って?」

「その依林という女性に電話して、月々の自動引き落としでいったいどんなところに入金しているのか、中国への送金はどうしているのか、そして『ハロー・パレス』の他の住人はどうなのかもできれば訊いてくれたまえ」

「……ええ?」

アリスがいきなりなにを言いだしたのか、さっぱりわからなかった。依林(イーリン)さんたちが払ってる公共料金だの共益金だの家賃だの実家への仕送りだのが、なにか事件に関係あるの？

「あるかどうかわからないから調べるんじゃないか。さっさと電話したまえよ」

少佐(しょうさ)がNEET探偵(たんてい)事務所にやってきたのは、ちょうど部屋のファクシミリが依林さんから送られてきた預金通帳のコピーを吐(は)き出している最中だった。

「なんだこの、ほのかに薫(かお)るかぐわしい石鹸(せっけん)のにおいは。藤島中将(ふじしまちゅうじょう)説明しろッ」

入ってくるなり、モデルガンの銃口(じゅうこう)を僕の後頭部にぐりぐり押しつける。ああもうまたうるさいやつが増えた。

「昨日(きのう)電話通じなかったけど、どこ行ってたんですか」

「高田馬場(たかだのばば)で深夜に市街戦を展開していたら職務質問されたので市街地ゲリラの恐ろしさを説こうとしたら、同胞(どうほう)五人とまとめて署に連れていかれた。ふん。官憲(かんけん)もしょせん文民だな」

当たり前だアホか。振り向くと、迷彩色(めいさいしょく)のアーミーファッションで固めた、小学生なみに小さな体躯(たいく)が目に入る。これで大学生だというのだから色々な意味で驚きだ。少佐はゴーグルをヘルメットの上に押し上げると、僕の頭の上を通り越して寝室の奥をにらんだ。

メオはまるでアリスを襲撃(しゅうげき)者からかばうように腕(うで)の中に深く抱(だ)きすくめて、警戒の目を少佐に返している。

「メオ、いちいちぎゅうぎゅう首をしめるな殺す気かい！」

「だって怪しい人が来た」

「大丈夫、この見た目も、中身ほどは怪しくないから安心したまえ」

いや……それフォローになってなくね？

「貴様(きさま)が今回の依頼者か。自分は少佐だ。こっちの藤島中将の上官にあたる」

「あのう、前から疑問に思ってたんですけど少佐より中将の方がえらいですよね？」

「これだから素人(しろうと)は困る」

少佐はやれやれと首を振って、バックパックをおろし銃をしまった。

「少佐こそ軍の実質的な最高位だということは世界の常識。『最後の大隊(LAZTE BATTALION)』指揮者を見ろ平気で上官を皆殺しにしていたぞ」

「漫画(まんが)じゃないですか」

「ア・バオア・クー戦の最後でも少佐が少将(しょうしょう)を射殺していたがだれも罪に問わなかった」

「アニメじゃないですかッ」それにあれは直後に敗戦したからだろ？

「ところで田原(たばら)組の事務所はわかっているのか」

僕の抗議をさっくり無視して少佐は話を始める。
「調査の基本はまず盗聴から。見てくれ、ピン型で去年の倍の集音と三倍の持続時間を実現したんだ」
鞄からいかがわしい装置を取り出して床にずらずら並べる少佐。
「探偵さんは色んな悪い人と友達なんだね」とメオがつぶやく。
「善良な人間にはできないことをやる商売だからね。少佐、会社の場所は知ってるね？　まずはそちらに仕掛けてくれたまえ。田原の事務所は一カ所しかまだつかんでいないが」アリスが口にした住所を少佐は携帯電話にメモる。「五次団体くらいの小さな組だからね、もっと上の方から関わっていたら調査範囲が爆発的に広がってしまうよ」
「盗聴器を仕掛けるのは百でも二百でもできるが、それを聴いて情報収集する人間の手間はどうにもならんな。せいぜい二カ所までだ。まあ、それは自分の方の仕事だから」
「金の出所がつかめれば関与している連中の深度も知れる。草壁昌也に関してもあちらの方が詳しいだろうしね、隠れる兎を追いかけるよりも猟犬を追いかける方が楽だ。……ふむ」
ファクシミリからのプリントアウトを取って数秒間じっと見たアリスは、紙を畳んで枕元に投げると、言った。
「草壁昌也は横領などやっていないね」
「ほんとに？」

僕とメオの声が重なった。
「そんなに喜ばれても困る」
アリスは、あいかわらず背後から抱きついているメオの胸に後頭部をぐりぐり押しつけた。
「ぼくの考えが正しければ、横領だった方がまだしも面倒が少なくて済む。残念なことにね」
「どういう……こと？」
でも、アリスは例によって、古今東西のあらゆる探偵が口にするあの文句でもって僕の疑問を断ち切った。
「今はまだ言えない」
僕はいらだち混じりの息を漏らす。アリスは続けた。
「前にも言ったね。ぼくが手にした真実は神様のメモ帳を盗み読みしただけのしろものだ。地上に生きる人間にとっては価値がない。価値ある事実とするためには、さらに多くの血と汗が流されなければならない」
「……助手さん翻訳して？　お父さん悪いことしてないんでしょ？」
メオがアリスの頭の上で言った。
「証拠が足りないからわからない、ってことだよ」
僕の説明に、少佐がうなずいて立ち上がった。

「じゃあ自分はまた血と汗を流しに行ってくる。久々の事件なのに遅刻してしまったからな。新作を試せると思うと心が躍る！　やくざのげっぷの回数までわかるくらいくっきり録音してみせよう」

　さらりとやばいことを言い残して迷彩服姿の背中が玄関の外に消えてしまうのを見届けてから、アリスは言った。

「ナルミ、憶えておきたまえ。この事件では事実は必要じゃない」

「……え？」

「フィックスのときとはちがう。ぼくらの仕事はメオを守り草壁昌也を見つけることだ。そうだね？」

　アリスが見上げると、メオが僕のかわりにうなずいた。

「だから、墓を暴いてまで事実を追求する義務はない。事態がそれを求めれば、真実も事実も歪める覚悟を持ちたまえ」

「証拠が見つからなくても適当に決めつけろってこと？」

「きみはどうしようもなく散文的な男だな」

　そんなの、覚悟を持つまでもなくそのつもりだった。僕はアリスとはちがって真実の探求にも事実の解明にも強迫されていない。ただ、さしあたってなにをすればいいのかわからないだけだ。そういうときだけ、アリスの強迫観念がうらやましくなる。

「さしあたってはメオをここから連れ出してマスターの部屋に連れていきたまえ」

「だめ。探偵さんまだドライヤーしてない」
「ほら、こんなことを言うんだ。温風が顔に吹きつける苦痛を何度説明してもわかろうとしないのだよ、まったく」
でもそのときばかりは僕はアリスの命令を無視した。ちゃんとブラッシングまでやってもらった方がいいだろう。
「こらメオ放せ、ナルミ待てぼくの言うことが聞けないのかい！」
メオの腕(うで)の中でぴいぴい泣くアリスを放置して、僕は事務所を出た。

✻

さてどうしようか、と考えながら非常階段を下りる。ついにやることがなくなってしまった。勝手口前の薄暗(うすぐら)い溜(た)まり場にはだれもいない。僕ってだれかに言われなきゃやることも見つけられないんだな、と少し落ち込む。
今日はバイトじゃないけど（試用期間中につき金土だけなのだ）、どうせやることがないならミンさんの手伝いをしようかな、と勝手口のノブに手をかけたとき、携帯がポケットの中で震えた。
『ナルミ頼む助けてくれ』
テツ先輩(せんぱい)の逼迫(ひっぱく)した声がいきなり流れ出す。

「どう、したんですか」
あのテツ先輩のこんなに追いつめられた声を聞くのははじめてだった。
『今どこ、「はなまる」か』「え、はい」『マンションの場所言うから来てくれ急いで』「あ、ちょ、ちょっと待ってください」
テツ先輩が住所を口走る。その向こうで、だれかべつの男のぼそぼそ言う声、それからかちゃかちゃとなにかがぶつかり合う細かい音。なんだ、いったいどこにいるんだ？
『絶対だれにも言うなよ殺されるぞ、頼む』
最後にだめ押しで物騒なことを言って電話は切れた。僕は疑問と不安を脳味噌の中で混ぜ合わせながらも、自転車のスタンドを蹴り上げる。

先輩の言っていたマンションは『はなまる』から自転車を飛ばして五分。目印らしい目印もなかったのでかなり探すのに苦労した。七階建ての最上階まで駆け上がり７０１号室のインタフォンを押す。
開いたドアの隙間からのぞいたのは、四十がらみの顔色の悪い男。下まぶたはたるみ、唇から鼻の横に色濃い古傷が走っている。後ずさって後ろの壁に背中をぶつけてしまった。
「テツ、ガキやぞ」
男が部屋の奥を振り返って言った。

「さっき話したやつです、入れてやってください」
　奥から聞こえてきたのはテツ先輩の声。耳からも汗が噴き出しそうなくらい安心する。よかった、ひとまず生きてる。
　男がチェーンを外してドアを開け直し、まず廊下に顔を突き出してあたりを確認する。それから僕をにらんで部屋の中をあごでしゃくった。
「入れや」
「え、あ、あの」
「早よせい」
　僕はかちんこちんになりながらもドアの中に足を踏み入れた。古傷男はドアを閉めて錠とチェーンをおろす。え、ちょっと待ってなんでそんな厳重なの？
　２ＤＫの奥の部屋に通された僕は、そこで繰り広げられている地獄絵図を見て愕然とすることになる。
　部屋には、他に三人の男が正方形の卓を囲んで座っていた。テツ先輩、アロハシャツのパンチパーマ、それから眉毛も頭髪もざっくり剃り上げた巨体のタコ坊主。そして——
「ポン」
「ぬりいなテツ鳴かすなや」
　ラシャをはった卓の上に並ぶ麻雀牌。

「ナルミよかった間に合った二千円貸してくれ」
　僕に背を向けて座ったテツ先輩(せんぱい)が振り向きものすごい形相(ぎょうそう)で手を差し出してきた。
「え、あ、はい」迫力に負けて思わず財布(さいふ)を取り出してしまう。
「貸したる言うとるのに」とタコ坊主(ぼうず)。
「ネモさんにこれ以上借りると十分で一割複利とか言い出すんでしょう」
「ガキ呼び出して借りんでも」
「この手をオープンリーチしない手はないです」テツ先輩は僕の手から引ったくった二千円と捨て牌を同時に卓に叩(たた)きつけると、手牌をすべて倒した。
「ピンズごっついガメとるな」
「なに待ちや、これ」
「よくわかんないけどピンズならだいたい全部あがれるんじゃないですか」とテツ先輩。
「258ピン369ピンの六面張(メンチャン)ですよ、じゃなくて!」思わず口を挟(はさ)んでしまった僕は勢いで先輩に食ってかかる。「なにしてんですかッ!」
「見りゃわかるだろ麻雀」
　人が心配して飛んできたのにこの腐(くさ)れギャンブラーは!
「だってリーチ代までなくなっちまったんだからしょうがない。お、ツモ。三本場ぶんぶんプンリー一発ツモメンチン……」

なにがしょうがないんだ。怒りに燃える僕をよそに、二千円の融資で復活したテツ先輩はその後もツキまくった。その卓で行われているのは、僕が知っている麻雀とはあらゆる面でちがっていた。まず三人しか打っていない（最初に部屋に案内してくれたあの男の人はコーヒーを淹れたり万札を両替するだけで参加してない）。次に、これが恐るべきところなのだが点棒を使っていない。だれかがあがるたびに卓の上で札が直接行き交うのである。なんか点数計算も全然ちがうみたいだし……

自分の二千円がものすごい金額に膨れ上がったり、また半分にしぼんだりするのを僕は肝が冷える思いで見守っていた。

「テツ、メシ行くか。グっさんどや」

一時間くらいしてお開きとなり、タコ坊主が立ち上がった。グっさんと呼ばれたパンチパーマは首を振る。

「俺これから抵当物件見にいかな」

「大変やな」

やくざ（たぶん）二人の会話を遠く聞きながら、僕はどっと噴き出した疲労で意識が遠くなりかけていた。とりあえず先輩は勝ってたみたいだし、よかった……と思っていたら「じゃネモさんこれ。二十万」「おう」とかって札束をごっそりタコ坊主に返してる。

「まあプラマイゼロだな」先輩はすがすがしい顔。
「僕の二千円……」
「あ、そうか。しばらく貸しといて。そしてできれば忘れてくれ」
「忘れませんよ二千円は大金ですっ！」
　マンションを出て、なぜかタコ坊主は僕も先輩と一緒に寿司屋に連れていった。どうも話を聞いてみると、メンツが足りなかったので最初の二十万円を無利子で貸し、さらに場代と昼飯をおごる、という条件でテツ先輩を卓に加えたようなのだ。つまり僕が到着したそのとき、先輩はかっきり二十万負けていたのである。恐ろしい。寿司屋のカウンターで先輩とタコ坊主に挟まれ、茶を持つ手はまだ震えていた。ていうかなんだよこの席順。挟むなよ！
「ほうか、じぶんあのヤク作ってたガキども叩いたやつか。聞いとる。見かけによらず度胸あるやないか。おごりやから遠慮なく食え」
　前回の事件はどうやらそっちの社会にも知れ渡っているらしく、タコ坊主はなんだかやけにフレンドリー。やめてくれ。僕は縮こまってカッパ巻きと玉子だけこそこそ注文する。そのうちタコ坊主は「どや学校やめてうち来るか」とか言うのである。先輩助けて。
「ネモさん、ナルミは将来ニート界をしょって立つ優秀な人材なんだから、組なんかに誘わないでください」あんたも勝手にそんなもん背負わすな。
「えっと、二人とも古いお知り合い、なん、です、か？」

僕は亀（かめ）のように首をすくめて必死で話題を逸（そ）らそうとした。

「いや初対面。知り合いの知り合いの知り合いくらい。さっき電話ではじめて話した。ちょうどメンツ足りないからってさ」

口にしたカッパ巻きを噴き出しそうになる。初対面ッ？

「わしもびっくりしたわ」全然驚いてなさそうな口調でタコ坊主が言う。「有名やから話は聞いとったけどな、アホみたいにノリええちゅうて。冗談（じょうだん）のつもりで誘ったらついてきた。度胸とかそういうレベルちゃうわ。惜しいのう、借金かぶせて組引き込もう思うてたのに」

僕は唖然（あぜん）としてテツ先輩の顔をうかがう。この人、命が惜しくないのか？

「うちの組はこれから伸びよるで。買い手市場や。どうせこの先（さき）無職やろ」

ああしまった、話がそっちに戻ってしまった。

「どやじぶん、手ぇ見してみ。手相（てそう）見るの得意なんや」

タコ坊主は僕の右手を強引に取り上げてしわを指でたどる。

「ほらな、感情線が知能線より上にあるやろ、この手相はやくざに向いとる」だれでも上にあるに決まってるだろアホか！　しかし突っ込めない。突っ込んだら殺される。

「星占（うらな）いも得意なんやで。じぶん誕生日いつや」

「……十月三十一日ですけど」

「蠍(さそり)座やな。蠍座はごっつう向いとるで。三月一日から二月二十八日までの間に生まれたやつはやくざ向きなんや」

　全員かよ！

「ネモさんってなに座なんですか」

「わしはやくざ」

「知ってるよ！」

　ああしまった、口に出して突っ込んでしまったもうだめだ殺される。タコ坊主(ぼうず)は僕の背中をばしばし叩(たた)いて大笑いし、寿司(すし)屋のカウンターはぐらぐら揺れる。

「じぶん見所(みどころ)あるわ。テツと一緒にうち来りゃええのに」

「いやですよあんなめんどくさい業界」と先輩(せんぱい)。その冷静さが忌々(いまいま)しい。

　もはや僕が頼れるのはカッパ巻きしかなかった。僕はひたすらカッパ巻きを口の中に突っ込んでキュウリの味に意識を集中させた。

　だから、頭越しに交わされていた二人の会話がいつの間にその話題に踏み込んだのかはわからなかった。

「ネモさん草壁昌也(くさかべまさや)って知ってますよね。前は大阪(おおさか)にいたって」

「……じぶん、あれに噛(か)んどったんか」

タコ坊主の声が低くなる。僕はぎょっとして、お茶で口の中の酢飯を喉に流し込んだ。
そうか、べつにテツ先輩は好きこのんでやくざ麻雀につきあっていたわけではなかったのだ。情報収集していたのか。
「それでわしにつきあったんか。アホか。やめとけ、今は田原だけでもそのうち上も動く。火傷じゃ済まへんで」
「そういうまともな意見は俺がお袋の腹の中にいたときに言ってくれないと」
タコ坊主は僕の肩越しにテツ先輩を殴ろうとした。ぴしゃり、とその拳が先輩の手のひらにおさまる。
「ふん」タコ坊主は座り直した。カウンターの向こうで、板前さんもびくびくとこちらをうかがっている。
「ほんで、じぶんと草壁はどないなつながりや」
「それは言えないんでネモさんが知ってることだけ教えてくれませんか」
「調子こくなあ、じぶん。聞いた通りや」
僕はびくびくしながらタコ坊主の様子をうかがう。ひさしの深い眼窩は横顔で見るとなお怖い。テツ先輩の腕をつかんで逃げ出そうかと思ったところで、再びタコ坊主が口を開く。
「で、どこにわしが喋る筋合いがあるんや」
「だってネモさん、草壁昌也と盃交わした仲でしょう。今は立場上手出しできないけど、俺になにか話してくれればあっちの力になれますよ」

タコ坊主の目がすぅっと細くなる。

「どこで知ったんやそれ」

「企業秘密ってことで」

テツ先輩はしれっと答えてヒラメの握りを口に放り込んだ。それからいきなり僕を押しのけてタコ坊主に向かって頭を下げる。

「お願いします」

しばらくだれも口をきかなかった。板前さえ包丁を手に息を殺していた。僕はもう怖くてタコ坊主の表情をうかがうことすらできなかった。

やがてタコ坊主は言った。

「じぶんが草壁の敵やないゆう保証は」

「俺の命以外にねぇッス」

ぞっとする。テツ先輩の言葉にも、それを受けてにたあっと笑ったタコ坊主にも。

「電話あったわ。受けたのはわしやないが」

僕は思わず「いつですか?」と訊きそうになる。かろうじて声が唇に引っかかって止まった。タコ坊主がこっちを向いて笑ってるんだか怒っているんだかわからないものすごい顔をするので、再び縮み上がる。

「昨日や。まだこのへんにおるで」

「電話で、なんて?」テツ先輩が僕の肩越しに訊く。
「海外へのツテ頼んどったの。急に言われても断るしかないが」
　海外へのツテ?
「外国に飛ぶつもりなんでしょうか」
「うちだけやのうて、他にもかけあっとるらしい。韓国か香港かシンガポールいうて。まあ飛ぶつもりやろな」
　外国へ、って——メオはどうするつもりなんだ。僕はいやな想像をカッパ巻きと一緒に濃いお茶でのどの奥に流し込む。
「草壁なら関西にいくらでも隠れ場所ありそうやけどな。なに考えとるのかわからんわ。逃げとるくせにあちこち渡りつけて、どこかで口の軽いやつが田原に漏らしたらどないすんのや」
「そういや変ですね。さっさと逃げりゃいいのに」
「で、じぶん、二億と娘の居場所知っとんのやろ」
　テツ先輩は眉一つ動かさなかった。でもタコ坊主は僕の顔を見ていきなり大笑いする。
「テツ、じぶん大したもんやけどこっちのは顔に出過ぎや」
　恥ずかしくて逃げ出したくなった。テツ先輩の顔をうかがう。この人大丈夫ですか?　追っ手に知らせちゃったりしないだろうか。タコ坊主は僕の背中をばんばん叩いた後で、急に真剣な顔に戻る。

「ありゃ会社の金やない。それくらいわかるやろ」
「あの会社と田原組ってなどういう関係なんですか」とテツ先輩。
「知らんで首突っ込んどったんか」タコ坊主はつるつるの額をおしぼりで拭った。「今の社長の美河が、草壁とつるんで起業するときに、田原に金出させた。もちろん借金返してしまいやない。なにか頼まれたらあの会社は田原には逆らえんわ。草壁はもともと組員やからそうなるちゅうのがわかってて、嫌がったそやけどな。金なきゃどうにもならん」
「草壁昌也もけっきょくは折れた、と」
「らしいな」
「で、あの金はなんなんですか」
「そこまで知るか。わしが言えるんはここまでや」

寿司屋を出てすぐにタコ坊主は声を落として言った。
「にしてもじぶん、こっちに関わり合いになるなら組に入ってからにせえとあちこちから言われてるやろ。ええ加減学べ」
「生涯いちニートですから」

タコ坊主はこっちの背筋がねじくれそうなくらい凄絶な笑みを浮かべると、テツ先輩の胸をどんとどやしつける。最後に「草壁のこと頼んだで」と言い残して、歩き去った。

その鷹揚な背中が角を曲がって見えなくなったところで、僕は全身しぼるようにして息を吐き出す。テツ先輩は笑って背中をさすってくれる。

「ナルミがそんなに固くなるこたねえのに」

「……なんで……僕を真ん中に座らせるんですか」

「あ、あの人ゲイらしいから。一応、対策ってことで」

なんの対策だよやめてくれよもう！

「大丈夫大丈夫。田原とは全然関係ない組だからさ。顔つないどくと色々便利なんだよ、やくざも」

なるほど、テツ先輩の謎に広い人脈はこうやって構築されてたのか。僕はどっと疲れて、寿司屋の駐車場の縁石に腰を下ろす。しばらく立てないかも。

「色々聞けたし、ありがとなナルミ。いやーあのメンチンあがれなかったらどうしようかと思ってたよ。初対面であんま借り作りたくなかったからさ」

「草壁の昔の仲間だなんて、よく知ってましたね……」

「ん？　あ、あれはてきとう」先輩はなんでもなさそうに言った。「関西系のヤーさんで連絡つくやつに片っ端からカマかけたの。みんな『はあ？　なに言ってんのおまえ？』みたいな反応だった。ネモさんがようやく当たりだったわけ。何人空振ったかわかんねえや。疲れた」

マジかよ。どんだけ命知らずなんだ、この人は。
「探偵は地道な努力が大切だからな」
　ニートに地道な努力を説かれるとは思ってなかったけど、今回ばかりはその成果を認めないわけにはいかない。
「草壁がまだこのへんでなんかやってるってわかっただけでも収穫。話せる人でよかったよ、ほんと」
「まあ……けっこういい人そうでしたけど」
　想像していたほど言動が粗暴なわけでもなかったし理不尽なことを言い出したりもしなかった。顔が怖かっただけで。ところが先輩は急に真顔になる。
「あのな、ナルミ。大事なことだから一つ憶えとけ」
　僕の腕をつかんで、引っぱり起こした。
「この世にいいやくざなんていない。いいやくざは死んだやくざだけだ」
　はあ。
「……四代目も？」ふと思いついて訊いてみる。
「あいつは俺が五十回くらい殺してるから、まあまあいいやくざ」
　自分も五十回くらい殺されているであろうテツ先輩は、笑ってそう答えた。
「あとは四代目待ちだな。この街にまだいるなら、平坂組の網にかかるかも」

＊

その日は、ただでさえ睡眠時間が足りなかった上にあちこちたらい回しにされてくたびれきっていたので、夕方に家に帰ってすぐ眠ってしまった。

なにかものすごい騒音で叩き起こされたとき、あたりは真っ暗だった。自分がうつぶせで寝ていたことにしばらく気づかず、起き上がろうとしてばたばたもがいてしまった。

明かりをつけるということも忘れて、暗闇の中、けたたましく叫び続ける音源を手探りする。『コロラド・ブルドッグ』のイントロ。アリスからの電話だ。

ようやく携帯を探り当てる。開くと、ちょうど日付が変わって零時五分。なんだよこんな時間に。

『草壁昌也の目撃情報があがったよ。四代目が撒いてくれた写真がヒットした。張り込みを開始するからすぐ来たまえ』

「……今……から？　すっごい眠いんだけど」

まだ頭の芯がぼんやりしていて、状況がよくわかっていない。目撃情報？　写真を持っていったのはほんの半日前なのに、やたらと早いな。

『すぐ来たまえと言ったんだ。きみの習った日本語では一時間ほど二度寝した後でも「すぐ」なのかい』

「いや、わかったよ行くよ、でもちょっと待って一時間くらい」
『きみがあまりにも遅いようなら、しかたがない、来る途中で行方不明になったと判断して、ぬいぐるみに埋まって幸福そうに口を開けて眠っている写真を尋ね人としてネットに流すよ』
「いつの間に撮ったんだよ！」眠気は一発で吹き飛び、僕はベッドから飛び降りる。
『ぼくは知っての通り心配性だからね、きみを案じるあまり三十分くらいしか待てないだろう』
　そうして通話は切れる。僕は携帯をベッドに叩きつけると、ジャンパーを羽織った。

屋上に通じるドアの前、暗闇（くらやみ）の中で携帯電話の液晶画面を確認すると、まだ午前二時半だった。今さっきアリスにたたき起こされたせいで、今日一日も夜明け前スタート。春休みが終わってから、ちゃんと学校に毎朝通う生活に復帰できるだろうか、とふと心配になる。

　狭い屋上だった。フェンスで囲まれた、六メートル四方くらいの空間。うらさびしい物干し台のシルエット。右手奥の隅（すみ）に、ぼんやりとした逆光に浮かび上がる小さな人影が見えた。

「遅かったな藤島中将（ふじしまちゅうじょう）」

　近づくと、少佐（しょうさ）は僕の方に顔も向けずに言った。手にした魚肉ソーセージをもしゃもしゃとかじりながら、階下に向けたスコープをのぞき、空いた左手で手元のパネルをなにやら調整している。さらには合計五つの小型モニタが足下に弧状に展開されていて、これがか細い光源となっていた。

「いっぺんアリスんとこ寄ってから来たんで」

「なぜここに直行しなかった」

「草壁昌也（くさかべまさや）の顔をシミュレータで立体に起こして、横からとか上からとかだとどう見えるか憶（おぼ）えさせられたんですよ」

4

水曜日の朝は、口の中に残ったドラッグの苦味みたいな、不快な予感から始まった。深夜の三時くらいまで眠れなかったせいで、起きてみると九時半。姉はとっくに仕事に出ていた。

居間に下りてテレビをつけてみる。金を持ち逃げした元やくざの副社長の件は、もちろんニュースにはなっていなかった。闇の中で始まって、みんな闇の中で終わろうとしている。でも世の中にはそういう悲劇の方が、スポットの当たっているものよりもずっと多いんだろう。

ドラマの再放送に変わってしまったテレビ画面をぼうっと十五分くらい見つめた後で、けっきょく着替えて家を出た。

昨日のミンさんの言葉がまだ耳に残っている。『関わるな』。四代目にもまったく同じことを言われた。それでも、家でじっとしているなんて耐えられなかった。

✻

その日まで知らなかったのだけれど、平坂組の事務所があるぼろっちいビルは三階だけではなく二階も組が借りていて、そちらはワンフロアぶちぬきで二十畳くらいの広間になっていた。床は板張りで、神棚があるところなど剣道場かなにかに見える。

木曜日、午前七時。まだ肌寒い斎場には、かなりの人数が集まっていた。四代目に連れられて広間に入った僕は嘆息する。組員が二十人、いや、もっといるだろうか。ひょっとして全員集まったのか？

ほぼ全員ユニフォームの黒Tシャツだったけど、電柱や岩男といった何人かは珍妙なかっこうをしていた。段ボールかなにかを切り貼りしたサンドイッチマンの看板みたいなものを肩にかぶって、下はだぶだぶのボンタン。

「おい、なんだそのかっこうは。ふざけてんのか」

四代目が見とがめる。

「はあ、羽織袴っス」

「せっかくハレの日なのに、裃なんて持ってないんで、昨日作りました」

6

　翌早朝、『ハロー・パレス』には僕自身がお金を持っていった。朝の空気で頭を冷やしたいのもあったし、依林（イーリン）さんに直接お礼を言っておかなきゃいけないと思ったからだ。

「あ、来た来た。入って」

　依林さんはチェーンを外して部屋のドアを開けると、僕を中に引っぱり込む。

　独（ひと）り暮らしには広すぎる2DKには、十人くらいの女性が集まっていた。僕はその形容しがたい芳香（ほうこう）に気圧（けお）されて、部屋の入り口で立ちすくんでしまう。中には、さっき仕事から帰ってきましたという風体（ふうてい）の色っぽいかっこうをしている人もいる。肌（はだ）の色も顔立ちもみんな微妙（びみょう）にばらばら。アジアの縮図みたい。ジョリファさんやホアさんの姿もあった。

「すみません、変なこと頼んじゃって」

　恐縮する僕の背中を依林さんがばしんと叩（たた）いた。

「わたしらはなにも大変じゃないよ。ただお金振り込むだけでしょ?」

　僕はうなずき、封筒に小分けされたお金を配って説明した。

「いっぺん自分の口座に入れてから引き落としで振り込んだ方がいい?」とホアさん。

メオはめちゃくちゃはしゃいで服を選んでいた。二分おきくらいに上着を変えたりリボンを取り替えたりして書斎（しょさい）の戸を開け、「助手さん、これどう？」と意見を求める。どれでもいいよ、もう。

電柱と岩男（いわお）は苦笑し、四代目はデスクの椅子（いす）に座って不機嫌顔（ふきげんがお）。俠気（おとこぎ）あふれる平坂（ひらさか）組事務所の雰囲気（ふんいき）は（まあ、メオが来てからずっとだけど）ぶち壊（こわ）しだった。

あれから一夜明けて、土曜日の午前。

徹夜（てつや）と怪我（けが）が響いて四代目の車で気絶してしまった僕は、マッハ肘（ひじ）打ちを食らっても起きなかったらしく、そのまま事務所のベッドにかつぎ込まれた。だからあの後の顚末（てんまつ）をよく知らない。ああ、やばい、姉貴（あねき）に連絡なしで二日も外泊してしまった。さすがに怒られる。

「おい、服なんてどうでもいいからさっさと出てけ。もうこの件は片づいたんだろ。いつまでも居着いてんじゃねえ、草壁も待ってる」

四代目はいらだちをむき出しにして書斎（しょさい）の戸に向かって怒鳴る。

「はあい！　組長さんもありがとう！　もうちょっと待って！」

無邪気（むじゃき）な声が返ってくる。

「どこにいるんですか、あの人」
「俺の知り合いの医者んとこ。内科医だけどな。他に場所なかったし、まだ田原の連中が嗅ぎ回ってる。ちょっと弱ってるだけで、べつに怪我してるわけでもなかったからな」
　そういえば、四代目はどうして草壁昌也の指が無事だと確信していたんだろう。指どころか、耳だって両方ともちゃんとついていた。確保したときの彼は、ひどく憔悴していたけれど傷一つなかったのだ。
「あのなあ。ちょっと考えりゃわかるだろ、そんなの」
　四代目は白けた目を僕に向ける。
「田原は草壁を横領犯ってことにしたかったんだろ。たとえば自殺に見せかけて始末するときに、耳だの指だの欠けてたら、岸和田会の連中が見てどう思う。監禁されてヤキ入れられてたようにしか見えないだろ。なんで捕まえてすぐに岸和田に引き渡さなかったんだ、って勘ぐられる。だから草壁の身体はきれいなままにしとかなきゃいけなかったんだよ。ありゃ下手踏んだ三下雑魚の耳と指だろ、たぶん」
　だから安い脅しだと言ったわけだ。説明されてみれば、簡単な理由。この世界のおおかたがそういうふうにできているにしても、なんだかみじめに負けた後の朝みたいな気分だった。
「メオに逢わせろって、草壁の方が言ってきたんですか」
「そうだよ。ああ、金もちゃんと払うってよ。礼は一言もなかったけどな。だからやくざは嫌なんだ」四代目は吐き捨てる。「会計はきちんとしろってアリスに言っとけよ。俺らだってボランティアやってんじゃねえん

だからな」
　そうか。ちゃんとメオに逢うのか。
　じゃあ――やっぱりメオの勝ちか。
　勝ち負けの問題でもないのだろうけど。
「……草壁に訊(き)きましたか？」
「なにを」
「どうしてメオに金持って逃げるように言ったのか」
　どうして、もっと他(ほか)の手段を選ばなかったのか。保身のためにしろ、選択肢(し)はいくつもあった。あんな、自分もメオも身動きがとれなくなるような、どうしようもない状況を選ぶ必要なんて、なかったはずなのに。
「どうでもいいだろ。そんなこと知ってどうするんだ。アリスが喜ぶだけじゃねえか」
「そうなんですけどね……」
「あと、てめえでわかってることをいちいち他人に訊くな。むかつくとこだけ飼(か)い主(ぬし)に似るんじゃねえ」
　ずばっと言われて、僕は首をすくめた。
「わかっては、いるんですけれど。でも理解できないんですよ、色々と」
　アリスに言わせるなら、真実ではあっても事実になっていない。

それに、アリスが僕の計画に口出ししてきた、振込先に対する要求。彼女は事件が終わってからもかたくなに、なにも教えてくれなかった。
「おまえが張ってたとき、草壁（くさかべ）がスーパーで買ってたもの言ってみろ」
　四代目は舌打ちし、髪（かみ）をかき混ぜる。
「……え？」
　それは。
　アリスも調べていたことだ。四代目には、その意味がわかったんだろうか。
「ええと。……包丁（ほうちょう）とか、制汗（せいかん）スプレー、針と糸、ライター」
「鋏（はさみ）かカッターナイフもあっただろう。あと包帯（ほうたい）」
　なんでわかるの？　僕は目を白黒させる。
「見りゃわかるじゃねえか。そりゃ指詰める道具だ」
　指？
「エンコ詰めだよ。詳（くわ）しく教えてやろうか？　一人でやるなんてめったにないけどな。映画でよくやってる手の甲（こう）を上に向けるのは嘘（うそ）だ。指の腹を上にして指曲げて、包丁をなにかで固定してぶっ叩（たた）く」
　あ……割り箸（ばし）とガムテープはひょっとしてそのためか。僕は思わずその不器用にグロテスクな光景を想像して、ぞっとする。暗いプレハブ小屋の中、ひとりで小学生の工作みたいな即席ギロチンを組み立てて小

指をその下に置く草壁昌也の姿。
「あの状況なら医者にも行けなかっただろ。指の切断面はそのままじゃ中に骨があるから縫えない。だから傷口の骨を鋏かナイフで削って短くしてから、まわりの肉を寄せて傷口を縫う。クールスプレーは即席麻酔だ。缶一本丸ごと指に使うとしばらくなんにも感じなくなる」
たぶん僕はひどく青ざめていただろうと思う。
「……なんで……そんなこと」
「だから、岸和田の組長宅の近くに隠れてたんだろ。手回しが全部だめになったら指詰めて直談判するつもりだったんじゃねえのか」
「あ……」
やくざはほんと馬鹿ばっかりだ。四代目が吐き捨てる。
「そろそろ車回してくる」
四代目は立ち上がった。事務所を出しなに、振り向いてぽつりと言う。
「マネーロンダリングの仕組みを守りたかったんだろ、草壁も」
鉄扉はゆっくりと閉まった。僕はため息をつく。アリスが黙っているぶん、今回は四代目が探偵役みたいだな……。蛇の道は蛇、ってとこだろうか。
簡単な問題だった。僕が馬鹿だっただけだ。

ただ、今の答えをそのまま解答用紙に書いたらバツを食らうだろう。表現に皮肉が過ぎる。僕は草壁昌也の、家族を守るための悲壮な覚悟を思って身震いした。
追っ手から逃げながらもこの街に留まり、彼があちこちにかけていた電話。あれは外国に逃げる算段じゃなかった。海外経由で送金するつてを探していたのだ。
彼は、岸和田会から回されて処理しきれなくなっていた二億円を洗浄する手段を、どうにかして都合しようとしていたのだ。
足下に目を落とす。なにかの抜け殻みたいな、ボストンバッグ。すべての答え。
「決めたっ」
書斎の戸が勢いよく開いて、メオが飛び出してくる。
「どうかな」
真っ白でフリルたくさんひらひらのワンピース。肩口は大きく開いている。まだ四月なんだけど、こいつの頭は年中夏なのか。半袖なので、包帯を巻いた左肘が見えていた。あのとき、父親をつかもうとした腕。
メオの手は——ちゃんと届いた。
「腕、大丈夫だった？」
「え？　あ、うん、まだちょっと痛いけど骨は大丈夫だって。メオ、レントゲン撮るのはじめてだったの、あれって面白いね」

人生楽しそうだな、こいつ。

「……なんであそこにいたの」

黙って出ていくなって、あれほど言ったのに。でも、僕の追及は、なんだか負け犬の遠吠えみたいだった。

メオの笑顔は一発でしゅんとしぼんでしまう。

「えと。あの。ごめんなさい。でも」

事務所の入り口に立つ電柱と岩男を、メオはちらと見た。

「ちゃんと、言ったよ？　メオも行くって。そしたら、乗せてくれた」

僕もじとーっと二人を見た。電柱と岩男は顔を赤らめてうつむいた。やめろ気持ち悪いから。こいつら女に免疫ゼロかよ。

「兄貴もうかんべんしてください、それ昨日壮さんにめちゃくちゃ怒られたんで」と、電柱は僕に向かって手を合わせてへこへこ頭を下げる。

僕は首を振った。責める気も起きない。

だって、メオが勝ったのだから。

「助手さんも大丈夫だったの、怪我」

「ん？　ああ、大したことない」

ガーゼを貼られた頬をなでる。こんなの、怪我のうちにも入らない。他の人たちが支払った代償に比べれば、ちりみたいなものだ。

草壁昌也(くさかべまさや)や、アリスが背負ったものに比べれば。

「……メオは、ずっとわかってたの?」

「ん?」

「お父(とう)さんがどうして逃げ回ってたのか。どうしてお金を隠(かく)させたのか。どうして警察に行かなかったのか」

「難しいことはよくわかんない」とメオは首を傾(かし)げる。「でも、あのマンションはお父さんとお母(かあ)さんとメオが暮らしてた場所だから。お姉(ねえ)さんたちも、お父さんいないと困るし。だからきっと戻ってくるって思ってた」

また一緒に『ハロー・パレス』で暮らせると、メオは今でも信じているのだ。みんな元通りになると。

それから草壁昌也も、やっぱりその奇蹟(きせき)を信じていた。

あの電話で叫んだ、最後の言葉。メオにだけ向けられた、タイの言葉。

「あれは……なんのことかよくわからなかった。『おまえには母親がいっぱいいるから』って。マンションのお姉さんたちのことかな。いっぱいいるから大丈夫、ってことだったのかな」

その言葉は、メオを通り抜けて、アリスに届いた。

それだけでよく解けたものだ。

彼はあのマンションを守りたかったのだ。

アジアの色んな国から彼のもとに集まった、家族を。

彼がいちばん恐れていたのは、自分の手元に汚れた資金がだぶついている——つまり、『ハロー・パレス』の洗浄能力が限界であるということを、岸和田会に知られてしまうことだった。それを知ったら岸和田会は『ハロー・パレス』を見限る。マネーロンダリングの仕組みを放棄するとなれば、露見を恐れた暴力団によって濾過装置の一部である『ハロー・パレス』は解体され、住人たちは日本にいられなくなってしまう。警察に行っても同じことだ。

　だから、逃げた。

　あきれたことに、ほんとうに横領したふりをしたのだ。すでに自宅には近づけなくなっていたから、メオに電話をかけて、二億円を持ち出させた。美河も田原組もさぞ驚いただろう。草壁昌也の目的なんて知らないのだから。

　つまり、資金が「洗浄しきれずに余っている」ことを岸和田会に悟られないように、「洗浄せずに着服した」ように見せかけたのだ。そんなことをするなんてだれが気づける？　でも、それが答えだ。時間を稼ぐしかなかったのだ。逃げ回って、もがいて、祈って、奇蹟を待つしかなかった。馬鹿だなあ。元通りになるわけないだろ。

　でも、メオは笑って首を振る。

「そんなことないよ。だって、お父さん、ちゃんと生きてた。生きてれば大丈夫。いつか元通りになるよ」

　生きていれば、ね。

僕はメオに背を向けてかがみ込むと、ボストンバッグのジッパーを引いた。中を手で探る。すべての答えは、持ち手のすぐ裏側にあった。隠しポケットだ。僕は縫い目の間を探って、中にあったものを引っぱり出した。

それは、いつか見た草壁昌也のものと同タイプの、真っ白な携帯電話。

開くと、どこか南国の浜辺を背景に二人の男女が映った待ち受け画像。仏頂面の草壁昌也はまだ三十手前くらいの若さで、その隣に寄り添う女性はメオそっくりだった。

いつだって答えはシンプルだ。どうやってアリスがこれに気づいたのかはわからないけど。

草壁昌也はメオと連絡を取る必要なんてなかったのだ。いつでも居場所を知ることができたのだから。

メオのそばには、いつでも——母親がついていたのだから。

「どうしたの助手さん」

メオが肩越しにのぞき込もうとしたので、僕はあわてて携帯を隠しポケットに押し込むとジッパーを閉めた。大人になったら渡すと草壁昌也が言っていたのだから、ここは彼の意思を尊重しよう。

思えば、彼もずっと妻と一緒にいたのだ。

毎月、わざわざこのバッグで洗浄資金を運んでいたのは、万が一の紛失や盗難に備えるという理由だけじゃなかっただろう。たぶんね。

僕とメオは、電柱と岩男に挟まれて事務所を出ると、エレベーターで一階まで下りた。鱗雲の間から春の陽が柔らかく降る、土曜日の昼前。ビルの前の坂になった車道では、四代目の銀のシビック（この人、いったい車何台持ってるんだろう）が後部ドアを開いて待っている。

乗り込む寸前に、メオが振り向いて言った。

「そうだ、助手さん。言われた通り、お父さんにちゃんと言ってみるね」

僕はぽかんとする。なんのこと？

「それで、だめだったら、そのときは助手さんよろしくね。メオが十六歳になったら、助手さんも十八歳だよね？」

だめだったら、ってなに？　よろしくってどういうこと？

「色々ありがとう。すっごく、ありがとう」

シビックが走り去った後で、電柱がぽつりと言った。

「やっぱ姐さんに報告かな。浮気はいけねえよ」

岩男が返す。

「でも兄貴はこれぐらいブイブイいわせてくれないと」

だからなんの話だよ。

✻

気づけば僕の春休みはもう終わろうとしていた。あっという間の一週間。

昨日、メオを見送ってからはすぐに『はなまる』でバイトだった。くたびれきって帰ってきて久々に家で寝たので、陽がかなり高くなってカーテンの間から差し込み顔を直撃するまで目が覚めなかった。寝ぼけ眼で時計を見ると、もう十時。

「あんたの朝ご飯ないよ」

着替えて一階に下りた僕を迎えてくれたのは姉のそんな冷たい一言。しかたなくバナナとミカンで空腹をごまかし、部屋に戻った。今日から試用期間も終わって本格的にバイトだから、まかないを食べさせてもらえばいいや。

もう僕にとっては終わってしまった事件ではあるけれど、それでもなんとなくネットにつないでニュースをチェックしてしまう。

昨日までなんだか危機感が麻痺していたけれど、冷静になって考えてみると僕のやったことはかなり犯罪すれすれだった。ハロー・コーポに乗り込むときに社員に顔見られてるし。僕はまだいい、平坂組の連中なんて立派に暴力行為で立件できるようなことをしでかしている。

今のところ銀行の駐車場で起きた襲撃事件は表沙汰にはなっていなかったし、僕のまわりには警察の手は及んでいないようだった。でも田原組にもにらまれるようなことをしたわけだし（その点については、四代目は気にするな平気だからと言ってくれたけど）、大丈夫だろうか僕は。ちゃんと明日から普通の高校生活に戻れるかどうか不安だった。

チャイムが鳴ったのは十時半くらい。

気にも留めず、しばらくぼんやりとネットを巡回していると、足音が階段を上がってきた。

「なんか、桑原っていうチャラい男が迎えに来てるよ」と姉が言う。僕はびっくりして椅子から下りた。ヒロさんが？

家の前には、あのブルーの外国車が停まっていた。

「お姉さんめっさ美人じゃん。紹介して」

ヒロさん、顔を合わせて最初の言葉がこれである。まったくこの人はもう。

「ええと……どうしたんですか。来るなら電話くれればよかったのに」

「電話したらきみは逃げるかもしれないからね」

ヒロさんの肩越し、車の方から少女の声。僕は驚いて背伸びする。後部座席の窓が開いていて、クマのぬいぐるみの耳と、艶やかな黒髪が見えた。なんでアリスまで？

「まあ、いいから乗りなよ」
ヒロさんはドアを開いて僕をアリスの隣に押し込むと、運転席に乗った。その日のアリスは、暖色系でちょっとカントリー風の、チェック柄とフリルを多用したドレス。これはこれで人形っぽい。
「けっこう色々持ってんだね、服」
「できれば外界に出るときには、いつも喪服でこの身を鎧いたいところだけれどね。今日の行き先も、そうもいかない」
今日の行き先？
「きみも昼からまた『はなまる』でバイトだろう。春期休業も今日で終わりだね。ここしか空いている時間はなかったからね。ヒロ、出してくれたまえ」
「えっと……どこに行──」
ヒロさんの車は優秀な加速度で滑り出し、僕はのけぞって質問の言葉を呑み込んでしまう。
「気をつけたまえ土産が潰れる！」
アリスに言われて、僕は座席の隅に置いてあるその箱に気づいた。『はなまる』のロゴが入った黒い箱だ。
「土産？」
「マスターが作ってくれた特製のアイスケーキだよ。潰れてないだろうね？」

ちょっと箱が歪んで、蓋が開きかけていた。中をのぞいてみると、チョコレートやデコレートチップスで綺麗に飾りつけられた卵形のアイスクリームがドライアイスに囲まれて四つ入っている。
「大丈夫みたい。……珍しいアイスだなこれ」
「イースターエッグだよ」
イースターエッグ？
「今日は復活祭だからね。きみも知らないのかい。イエス・キリストが磔刑死してから三日後に復活したのを祝う祭りだよ。日本人はクリスマスだけは大騒ぎするが復活祭は日付も知らないのがほとんどだ。単純な祝い事ではないからかもしれないね。受難があってはじめて奇蹟の価値がある。とはいえ」
アリスは箱の蓋を閉めた。
「ぼくとて誇り高き無節操な日本人だからね。素直にアイスだけ楽しむことにするよ。受難日も安息日も草壁昌也に任せておけばいい。ぼくらは素直に再会の奇蹟を祝おう」
再会の奇蹟？
そこで僕らの会話は途切れた。
アリスはじっと運転席の背中を見つめている。ヒロさんは黙ってステアリングを握っている。高級外国車はまるでよく調教された深海魚みたいに静かに車道を滑っていく。どこに向かっているんだろう。駅とも『はなまる』とも反対方向だけど。

「……なにも訊かないのだね」
アリスがぽつりと言った。
「なにか訊いたら答えてくれるの」
「いいや。たぶんなに一つ答えてやらない」
ヒロさんの肩がかすかに揺れた。笑ったのだ。あいかわらずアリスは身も蓋もないひどいやつだ。でも、僕はもう彼女がなにを考えていたのか知っていた。だから、あのときなにも説明してくれなかったのも責めるつもりはない。
「じゃあ、勝手に喋っていいかな。僕の、ただの思いつき。アリスは聞いてるだけ」
「好きにしたまえ」
素っ気なく言いながらも、アリスはクマのぬいぐるみを挟んで、僕の服の裾をしっかり握りしめていた。
「――僕は最初、草壁昌也の口座に二億円全部入金するつもりだった。でもアリスは止めたよね。そんで、一部だけをあの互助組合の口座に入れて、残りはあちこちの正体も知れない口座に振り分けさせた」
アリスはかすかにうなずいた。
あのとき。僕が電話で計画を話したとき、アリスが要求したことが、これだった。つまり、僕が美河社長に言った嘘は岸和田会への寄付だけじゃなかったのだ。

ほんとうは、草壁昌也の口座には一千万くらいしか入っていなかった。一千万円分の振り込み明細でも、大量に分割されたものをどばっと見せつければ目くらましとしては充分。アリスはそう言ったし、実際にその通りだった。五百人分もの利用控えすべてをチェックする余裕なんて彼らにはなかっただろう。

「調べたわけじゃないから推測なんだけど、あのたくさんの口座は、岸和田会があちこちに色んな名義で持っている口座――だよね?」

アリスの横顔が固まる。ここから先は、彼女が守ろうとした領域。

「アリスはマネーロンダリングをやったんだ」

ため息みたいに言葉を吐き出した。

それしか答えはなかった。

汚れた二億円を分割して、数百人分の口座名義で名前を与えてあちこちに入金し、出所を隠して岸和田会に還元した。それは、まぎれもない資金洗浄だ。

なんのために?

そこから先はもう考えるまでもない。アリスは、草壁昌也が自分の身の安全を捨ててまでこの街に留まっていた目的を、そのまま肩代わりしたのだ。だぶついた資金を処理するために。岸和田会に『ハロー・パレス』を見捨てさせないために。草壁昌也や、メオや、依林さんたちの家を――守る、ために。

それは、もう、探偵の仕事じゃない。アリスが自分で言っていた通り。それに――

「資金洗浄(せんじょう)は犯罪だよね。相手がどんな口座かを知って入金を指示したとばれたら捕(つか)まる。僕はあんまり詳(くわ)しくないけど、この方法はあまりうまいやり方じゃないからばれる可能性もけっこうあると思う。だから」

アリスの、人形のような横顔を見つめた。

「だから、僕になにも教えなかったんだろ？」

振込先はアリスの指示。僕はただ、それに従っただけ。そうすれば、僕に罪はなくなる。そんな方便がほんとうに通用するのかはわからない、けれどアリスが選んだ、僕を守るためのやりかた。

僕は口をつぐんだ。ほんとうは、こう言ってあげたかった。だれかを助けたり守ったりすることができないなんて、嘘だよ、と。でもそれは言葉にできなかった。

なぜかは、わからない。

長い長い沈黙があった。車は渋滞を抜けて信号を三つ渡り、広い国道に出ていた。

「――死んだ言葉を掘り返す虚しさが、理解できたかい」

やがてアリスがかすれた声で言った。

僕はうなずいた。こんなの、だれにとってもなんの意味もない。それでも、言葉にせずにはいられない。アリスはこれを何度繰り返し、そのたびに心を削ってきたんだろう。

「では、もうどうでもいいだろう。メオも草壁昌也も、ぼくもきみも、生きている。これからも生きていかなきゃいけない。岸和田会も今頃は横領の真相を知っただろう。だからといって、草壁昌也が背負わされたものは消えない。美河がやったことの落とし前は、彼と会社がつけなきゃいけない。それがやくざの世界の絶対だ。それに、洗浄能力がもはや限界であることにもかかわりはない。ごくわずか、崩壊までの猶予が伸びただけだ。探偵がいくら小細工を弄そうとも、いくばくかの時間を稼ごうとも、一度壊れたものは元には戻らない。それでも――」

アリスは窓の外の景色に目をやる。車はゆるやかな坂を上っていく。見たことのある風景。

「それでもぼくらは、生きていかなきゃいけない。残されたものをつぎはぎして、綻びを繕って、折れた櫂で川面をかき混ぜて。生きている限り生き続けなきゃいけない。それは神様が、ぼくらニートさえも例外とすることなくすべての生命に書き込んだ命令だ。だから、今は生きている人間のことだけ考えようじゃないか。ほら、もう到着した」

生きている人間の——

え、到着？

車は静かに停車した。どこかの駐車場だ。アスファルトの上にずっと続く白線の区切りと、まばらな自動車の影。僕は頭を低くして窓の外に目をやる。左手に、いくつもの棟に分かれた大きな建物が見える。

僕はその建物を知っていた。幅の広い正面玄関の上に掲げられた病院の名前は、しっかりと記憶にあった。

「さっさと降りたまえよ。見舞いの土産を忘れずにね」

アリスがぬいぐるみの頭で僕の顔をぐいぐい押すので、僕は呆けたようになりながらも、ふらふらとドアを開いて車を降りた。

「彩夏、昨日意識が戻ったんだってさ」

ヒロさんの言ったことを理解するのに、かなりの時間がかかった。

彩夏の、意識が戻った？

「なにをぼうっと突っ立っているんだい」

続いて降りてきたアリスが、ぬいぐるみを僕の腰に押しつけ、シャツの裾にしがみついて言った。

「まさかこの期に及んで見舞いに行きたくないなどと言うんじゃないだろうね」

「え、あ、いや……」

生きている人間のこと。

メオは言っていた。生きていれば、いつか元通りになる。そんな言葉を無邪気に信じるには、僕はもう色んなくだらない目に遭いすぎていた。それでも。それでも――

信じていなくても、奇蹟は無慈悲に、無関心に、無感動に、だれにでも一度起こる。だれにも気づかれなくても。だれにも感謝されなくても。

「だからイースターエッグが四つなのだよ。いいかい、もし彩夏がまだアイスはだめだということになったらぼくが二つ食べるからね、ナルミ、聞いているのかい」

「うん、聞いてるよ」

弱々しくうなずいた。

ヒロさんが笑って僕ら二人を見て、それから病院の玄関に足を向ける。アリスが僕の背中を押す。頼りない腕で、頼りない力で。

それじゃあ――

生きている人間のことだけ考えよう。
僕は手にしたアイスの箱の重みを確かめると、ヒロさんの背中を追いかけて歩き出した。

〈了〉

あとがき

今年、人生ではじめての確定申告(しんこく)というものをやってきました。収入が少なく、一社でしか本を出してもらっていませんから所得の計算が楽で、定時の仕事をしているわけではないので時間はいくらでもあり、しかも税務署が自転車で十五分の近さにある——という好条件がそろっていたのに、根が無精(ぶしょう)なもので期限ぎりぎりいっぱい三月十四日に申告です。必要経費の計算は知り合いにレシートをどばっと預けて任せっきりにしておいてこの体(てい)たらくですから、来年かなり心配です。電気料金の控えを丸ごと失(な)くしたりしてるのでほんとうはもうちょっと経費が計上できたはずです。むしろアレとかアレとかも資料という名目で経費にできるんじゃないか、なんてがめついことを考えてしまいます。そういった、生まれてはじめての『税金』に対する意識。この二巻のプロットはそこから着想しました。

……というのはもちろん真(ま)っ赤(か)な嘘(うそ)で、三月に考えついた物語が六月に出版できるわけがありませんごめんなさい。ただでさえ書くの遅いんだし。見事に滑(すべ)りましたが今回もあとがきに四ページもらえたのでこのまま話を続けます。

小説の着想をいつ得たのかをあとがきに書いておくのは、実は脱税——じゃなかった節税の観点から重要なことなのではないかと思います。

たとえば僕が今度、音楽を題材にした小説を出すとして、作中に出てくる曲のCDを買って経費で落としたとしましょう。税務調査でそのCDの領収書が発見されたとき、「小説のために資料として買ったんじゃなくて、もっと前に買っていたCDを経費で落とすために無理矢理小説に出したんじゃないのか」なんて真相を看破されて追徴課税されるといけませんから、こうしてあとがきで予防線を張っておくわけです。この小説のアイディアは○月○日に思いつきましたよ、と。そうすれば領収書の日付がそれ以降であることによって、資料として買ったという事実が証明できます。

あとがきというものは文字通り後から書くものだからなんの根拠にもならないということは税務署には内緒にしておいてください。

のっけから意地汚い銭の話ばかり続くことからもおわかりのように、今回はお金の話です。ところで二億円という金額を即物的な感覚に置き換えるとき、どういったものを想像するでしょうか。チロルチョコ二千万個ぶんとか即答すると年齢がばれそうです（最近は十円じゃないのが多いし）。うまい棒二千万本ぶんだと出自がばれます。

二億円を抱えた女の子が探偵事務所に駆け込んでくるという導入を思いついたとき、僕が思い出したのは、昔雀荘に勤めていた頃にたまに顔を見せた客の一人の話でした。

「人間の命は金で買えないというけど」と彼は言いました。「売ることはできる。人間一人を破滅させると、出てくる金額はだいたい二千万円だ。どんなに貧乏なやつでも」

ほんとうはそのときの彼はべろべろに酔っぱらっていて言葉遣いがもっと支離滅裂だったので、右のせりふはあくまで要約です。彼の弁によれば二億円というのは十人分の人生の値段ということになります。なにしろ目つきがやばい人だったので、具体的に人間一人からどういう方法で二千万円を抽出するのかは怖くて訊けませんでした。ただの出任せだった可能性もあります。

その後、彼の姿を見かけた人はいません。あるいは泡のように二千万円を吐き出した後で、新宿の暗いぬかるみに沈んで消えてしまったのかもしれません。

ところで、作中に登場する三人麻雀は僕が実際に雀荘で教わったルールなのですが、最近になってネットで調べてみたところ、どうも僕の勤めていた店周辺でしか普及していないルールだったようです。東天紅というルールがそれにかなり近いので、おそらくうちのオーナーが東天紅をベースに独自のルールを追加して作ったのでしょう。北が抜きドラではなく場風だったのですが、これはオーナーの出身地である北海道での麻雀によくあるローカルルールなのだそうです。

なぜあとがきにこんな大多数の読者にはわからない話を書いているのかというと、ひょっとしたら僕が教わったのと同じルールをご存じの方がこの本を手に取って、この文章を読んでくれるかもしれない、という淡い期待からです。

新宿の雀荘の薄暗がりですれ違ったかもしれない僕らが、ぬかるみの中をともに生き延び、数年後の今になって小説のあとがきを介して再会できたとしたら、それはきっと、些細だけれどかけがえのない奇蹟

でしょう。

もしかしたら僕から借金したまま音沙汰のなくなったあの人とかあの人かもしれませんね。せっかく珍しく真面目に締めようとしたあとがきがぶち壊しですね。金返してください。

今回も担当編集の湯浅さまとイラストレーターの岸田メルさまをはじめ、大勢の方々からの多大なご協力をいただいてなんとか本になりました。イラストが見たいからという理由で四代目の出番を増やしたなんてことは全然まったくこれっぽっちもないのですが、いただいたラフデザインがメオも四代目もあまりにイメージ通りだったのでめちゃくちゃ嬉しいです。いつものようにこの場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

二〇〇七年四月　杉井 光

杉井　光

1978年、東京生まれ。そのくせ電車の混雑が苦手で埼玉にすら自転車で行くことがしばしば。電車通勤していた時期は自分でもどうやって我慢していたのやら。あ、夜勤だからラッシュなかったっけ。

岸田メル

1983年生まれ、名古屋在住。好きな食べ物はラーメン。好きな飲み物は水。趣味は教育テレビを見ること。絵を描いてるときもずっと見てます。ホームページはhttp://maigo.jp/

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
http://dengekibunko.jp/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
電撃文庫編集部
「杉井 光先生」係
「岸田メル先生」係